

一〇〇〇年のゲニエズノにおける

オットー三世とボレスラフ・フロブリの会見について

——『匿名のガル年代記』第一卷第六章解釈の試み——

荒 木 勝

序 『匿名のガル年代記』の記述

第一章 聖アダルベルトゥス（聖ヴォイチェフ）

第二章 ポーランドにおける教会建設

第三章 聖マウリチウスの槍

第四章 パトリキウス

第五章 ボレスラフ・フロブリとカール大帝

第六章 結びにかえて——『匿名のガル年代記』からデュウゴシの年代記へ——

西暦一〇〇〇年、ドイツ皇帝オットー三世が、ローマからアルプスを越え、はるかな遼隔の地ポーランドに赴き、ポーランドの支配者ボレスラフ・フロブリとゲニエズノで会見した、という歴史上の一件は、ドイツ・ポーランド両国の文献史において特別の注意が払われてきた。ポーランドにおいては、その最古の年代記『匿名のガル年代記』

Galli Anonymi Chronicon の第一巻第六章に、この事件が特筆され、グニエズノ会見の際に、オットー三世がボレスラフ・フロブリに与えたとされる「皇帝の友・協力者 *frater et cooperator imperii*」、「ローマ人民の友・同盟者 *amicus et socius populi Romani*」という呼称は、「ポーランドの古き自由 *libertas antiqua Poloniae*」の一表現として、『匿名のガル年代記』が力説高唱するところのものであった。

本稿は、『匿名のガル年代記』の解説のためにはこの一事件の正確な理解は欠かすことができないと考え、この箇所に関する今日までの代表的な見解を整理紹介し、ポーランド中世の史書を貫く歴史意識の一端を明らかにしようとするものである*。

* 『匿名のガル年代記』については、拙稿「ポーランド最古の年代記——『匿名のガル年代記』について」(『岡山大学法学会雑誌』第三五巻第二号、一九八五年)参照。ポーランドの史書において、この事件に言及している代表的なものは、十二世紀末あるいは十三世紀初頭に書かれた『マギステル・ヴィンセントのポーランド年代記』*Magistri Vincentii Chronicon Polonorum*、十四世紀に作成・編集された『ヴィエルコ・ボルスカ年代記』*Chronica Poloniae Maioris*、中世ポーランドの最盛期、十五世紀中葉にヤン・ドゥウゴシによって書かれた、モニュメンタルな歴史書『名高きポーランド王国の年代記』*Annales seu Cronica incliti regni Poloniae* である。『マギステル・ヴィンセントのポーランド年代記』については、「聖スタニスワフ崇拜の形成について」(『岡山大学法学会雑誌』第三五巻第三・四号、一九八六年)参照。このグニエズノ会見についての研究は、ドイツ・ポーランドにおいてすでに長い歴史を持ち、多くの研究論文が書かれているが、その一部の文献リストについては、本論文末尾に紹介しておいた。

ところで、『匿名のガル年代記』第一巻第六章の叙述は次のようであった。

「神に祝福された聖アダルベルトゥスは、長い布教遍歴の旅に出て、そのうえ自国の民ボヘミアの反抗的な人々からも災難を蒙った。しかしながら、彼がボレスラフのところに赴いた時に、ボレスラフは大いなる敬意の心を抱

いてアダルベルトゥスを受け入れ、敬虔な心でアダルベルトゥスの教えと指示に従った。ところで、殉教者となつたこの聖人は、愛の炎と布教の熱に燃えていたが、ポーランドには、すでに信仰が芽生え、聖なる教会も育っていることを知って、恐れる心もなくブルシアへ渡り、そこで殉教者としての己の仕事を全うした。後にボレスラフは、聖人の遺体を、それと同じ重さの金でブルシア人から買い戻し、それを、恭しくゲニエズノの大司教座に安置した。……皇帝オットー・ルフスは、祈りと執成のために、またその機会にボレスラフの名声を確かめるために聖アダルベルトゥスの墓に詣でた。……ボレスラフは、王やローマ皇帝や賓客を接待するのに相応しいやり方で、光輝にあふれ、堂々たる態度で皇帝を迎え入れた。……ローマ皇帝は、彼の名声、勢威、富貴をみて讃嘆し、叫んだ。『我が帝国の王冠に輝くというが、私が見ているものは、うわさに聞いていたものよりもすばらしい！』そして大貴族達と諮ったあとで、居並ぶ者すべてに向つて、つけ加えた。『このような人物、このような偉大な人物をあたかも諸侯 *princeps* の一人であるかのように、公 *dux* あるいは、伯 *comes* と呼ぶのはよろしくない。輝く彼を王座に上げ、王冠で飾るべきである』。そして皇帝の冠を頭からはずして、それを友好的な同盟 *amicitia* の印としてボレスラフの頭に置いた。次いで凱旋旗と交換に、主の十字架の釘と聖マウリチウスの槍とを贈り物としてボレスラフに与えた。それに対してボレスラフは皇帝に聖アダルベルトゥスの腕を贈った。こうしてこの日、両人は大変強い愛情で結ばれたので、皇帝はボレスラフを帝国の兄弟、協力者 *frater et cooperator imperii* に任じ、またローマ国民の友、同盟者 *amicus et socius populi Romani* と呼んだ。さらに教会に関するすべての皇帝の権限を、ポーランド王国内においても、またすでにボレスラフによって征服された地および将来征服されるであろう地においても、すべてボレスラフおよび彼の後継者に譲った。ついでこの取り決めを法王シルヴェステルは聖ローマ教会の回勅によって確認した。こうして、光榮にも皇帝によって王座に登ることになったボレスラフは天性の氣前の良さを示した。」。

"beatum Adalbertum in longa peregrinatione et a sua rebelli gente Bohemica multas iniurias perpassum, ad se venientem cum magna veneratione suscepit, eiusque praedicationibus fideliter et institutionibus obedivit. Sanctus vero martir igne caritatis et zelo praedicationis accensus, ut aliquantulum iam in Polonia fidem pullulasse et sanctam ecclesiam excrevisse conspexit, intrepidus Prusiam intravit, ibique martirio suam agonem consummavit. Postea vero corpus ipsius ab ipsis Prusis Boleslavus auri pondere comparavit, et in Gneznensi metropoli condigno honore collocavit. Otto Rufus imperator ad sanctum Adalbertum orationis ac reconciliationis gratia simulque gloriosi Boleslawi cognoscendi fama introivit. Quem Boleslavus sic honorifice et magnifice suscepit, ut regem imperatorem Romanum ac tantum hospitem suscipere decens fuit. Cuius gloriam et potentiam et divitias imperator Romanus considerans, admirando dixit : *Per coronam imperii mei, maiora sunt quae video, quam fama ferrepi* ; suorumque consultu magnatum coram omnibus adiecit : *Non est dignum tantum ac virum talem, sicut unum de principibus, ducem aut comitem nominari, sed in regale solium glorianter redimitum dyademate sublimari*. Et accipiens imperiale dyadema capitis sui, capiti Boleslawi in amicitiae foedus imposuit, et pro vexillo triumphali clavum ei de cruce Domini cum lancea sancti Mauricii dono dedit, pro quibus illi Boleslavus sancti Adalberti brachium redonavit. Et tanta sunt illa die dilectione cuncti, quod imperator eum fratrem et cooperatorem imperii constituit, et populi Romani amicum et socium appellavit. Insuper etiam in ecclesiasticis honoribus quicquid ad imperium pertinebat in regno Polonorum, vel in aliis superatis ab eo vel superandis regionibus barbarorum, suae suorumque potestati concessit, cuius pactionis decretum papa Silvester sanctae Romanae ecclesiae privilegio confirmavit. Igitur Boleslavus in regem ab imperatore

tam gloriose sublimatus, inditum sibi liberalitatem exercuit." (*Chronica Polonorum* [7] s. 429.)

以上の叙述から、我々は次の点を確認することができる。

- (1) 皇帝オットー三世がゲニエズノに赴いたのは、主として聖アダルベルトゥスの墓参りのためであった。
- (2) オットー三世は、ボレスラフ・フロブリの隆盛、栄華を見て感嘆し、ボレスラフの頭上に白らの冠を置き、彼を王座に挙げた。
- (3) オットー三世は、ボレスラフを「ローマ帝国の兄弟、協力者」に任じ、「ローマ国民の友、同盟者」と呼んだ。
- (4) オットー三世は、主イエス・キリストの十字架の釘と聖マウリチウスの槍を贈り、その返礼としてボレスラフは、聖遺物としての聖アダルベルトゥスの腕を贈った。
- (5) オットー三世は、ボレスラフに、ポーランド国内およびポーランド周辺の異教の地における皇帝の教会支配権を譲った。

九九六年、オットー三世が長い摂政時代を経て皇帝として直接権力を掌握したのは、十七才の時であり、一〇〇〇年のゲニエズノ墓参の時は、オットーはまだ弱冠二十才前後の若者にすぎなかった。しかも、積年のバヴァリア公ハインリッヒとの対立・緊張も根本的には解消しておらず、ザクセンと西スラブ族との国境、オドラ川下流域一帯には、まだ戦塵もたちこめていたこの時期に、ローマからアルプスを越え、ローマ皇帝としてかつて誰も足を踏み入れたことのなかったスラブの地に赴くということは、それ程容易な事柄ではなかった。

それでは、若きオットー三世を、このような大胆ともいえるゲニエズノ訪問へと駆りたてていったものは何であったのだろうか。『匿名のガル年代記』の伝えるところでは、オットー三世のゲニエズノ訪問の動機は、聖アダルベル

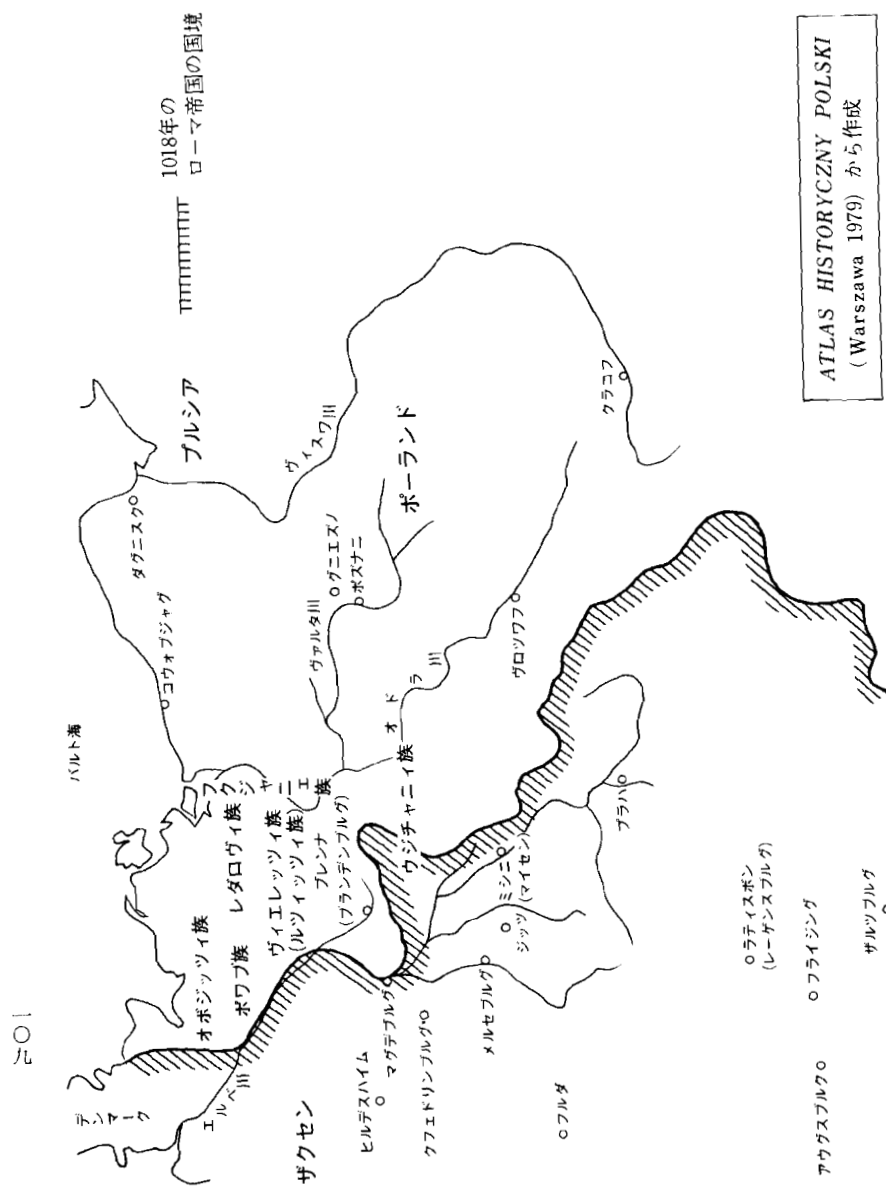
トゥスの墓詣、ということになっている。青年皇帝の宗教的熱情が、後世のポーランド史・ドイツ史にとって重大な意味を持つことになる一事件を惹き起こした、というわけである。

『匿名のガル年代記』のこの記述は、どの程度の真実を含んでいるのだろうか、またこの記述の意味するところは、何であるのか、我々もその点を確かめるために、この歴史的・一事件の宗教的側面に若干の光をあててみることにしよう。

* オットー二世 Otto II とヒザンティンの皇女テオファノ Theofano の息子として生まれたオットー三世の生涯は、まことに目まぐるしいものであった。九八〇年に生まれ、四才の時には、すでにドイツ王に即位し、十七才の時にローマで皇帝の位に即している。そしてその数年後には、ローマを追われ、再起を期す軍隊の陣営の中で一〇〇二年一月に没している。

オットー三世の政治を貫くものは、西スラブ族鎮圧のための度重なる出征と、政情不安定なイタリア・ローマへの二度にのぼる遠征である。オットー三世が、ドイツ王に即位した九八三年には、西スラブ族ボワブ人 Polab を中心とする北辺境伯テオドリック Teodorik に対する大反乱が起きているし、九八五年・六年にはやはり西スラブ族ヴィエレッツィ Wielecy に対して自ら討伐軍を率いて戦っている。さらに九八一年には、ブレンナ Brenna (今日のブランドンブルグ) の砦をポーランドのミェシコ一世とともに攻め、九八四年にセルブ人 Sclavi をのぞいて西スラブ族全体が大反乱を起こすと、翌九八五年に大軍を率いてスラブの地深く、とくにオボヅツィ族 Obodrzyce 討伐に遠征している。この戦は、九八八年まで続き、オットー自らも九八七年には、ヴィエレッツィ族 Wielecy 討伐を指揮している。

また九八三年から九八一年までの母テオファノの摂政、九八一年から九八六年までの祖母アデライダ Adelajda の摂政の時期を過ぎると、九八六年、自らイタリア経営に乗り出し、自らの縁名を法王グレゴリウス五世 Gregorius V として即位させたあと、自らローマでローマ皇帝の冠を戴くのである。その後西スラブ族討伐のためにローマを退くと、九八七年の初め、ローマ貴族クレスケンチウス Krescentius の反乱が生じるや、ただちにローマに取って返し、反乱鎮圧に成功する。九八九年の末ドイツに帰り、さらに一〇〇〇年の三月ポーランドのグニェズノを訪問する。帰路、マゲデブルグを通り、アーヘンに立ち寄り、有名なカール大帝の墓を開いてみる。しかし、一〇〇〇年の末、再びローマで反乱が生じるや、二度ローマに遠征し、反乱軍鎮圧の陣中に没する (SSS, I, III, s. 562)。



〔オットー三世関係年表〕

〔オットー三世〕	〔西スラブ族〕 ポーランド	〔イタリア〕 ローマ
972 オットー二世、ビザンティ ンの皇女テオファノと結婚。 オットー三世生まれる。	995 オボジツィ族、ヴィエ レッツィ族の大反乱。	オットー三世の ①=第一回のローマ訪問 ②=第二回のローマ訪問 ③=第三回のローマ訪問
980 オットー三世ドイツ王に即 位(4才)。バヴァリア公ハ インリッヒと対立。バヴァ リア公、チェコのボレスラ フ二世、ポーランドのミェ シコ一世、オボジツィの ムシチヴィと同盟。母テ オファノの摂政政治(～991)	963 ケロ辺境伯、ウウジツィ 族を討つ。 972 オットー二世のポーランド 侵入。 983 西スラブ族の大反乱。 北辺境伯テオドリックとの 戦、デンマーク、オドラ河 口に上陸。ミェシコ一世、 ドイツ側の陣営に入る。	
985末 ハインリッヒ、オットー 三世に忠誠を誓う。	984 チェコ、ミシニ(マイセン) を占領。 985～986 オットー三世、ヴィエ レッツィ族討伐。 986 ミェシコ一世、オットー三 世に忠誠を誓う。 987 エッケハルト、ミシニ(マ イセン)を奪回。 989～990 ミェシコ一世、チェコ からマウォポルスカ地方を 奪回。 990 西スラブの異教徒の大反乱。 991 テオファノ、クフエドリッ ンブルグでミェシコと会見。 オットー三世ミェシコとど もにブレンナを攻める。 992 オットー三世のブレンナ攻 撃続く。ザクセン族とオボ ジツィ族との戦。 994 西スラブ族の大反乱。 995 オットー三世の大遠征、ボ レスラフ・フロブリ、オッ ト三世の陣に加わり、オ ボジツィ族を討つ。	
991 祖母アデライダの摂政政治 (～996)	997夏 オットー三世の西スラブ 族討伐。ヴィエレッツィ族 を討つ(～998)。	996 オットー三世、5月ローマ で戴冠①法王グレゴリウス 五世(996～999) 997初 ローマ貴族クレスケンテ イウスの反乱 997末 オットー三世、ローマに 入り反乱を鎮圧する。②
996 5月 ローマ皇帝に即位(17 才)。		
999末 オットー三世、ドイツに 帰る。	1000 オットー三世、グロズノ 訪問。その後マクデブルグ 訪問	1000末 ローマで反乱軍生ずる。 オットー三世、ローマで反 乱軍と戦う。③ 1002 1月 バテノの陣中で没す る。
1000 オットー三世、アーヘンに てカール大帝の墓を開く。		

第一章 聖アダルベルトゥス（聖ヴォイチェフ）

オットー三世のゲニエズノに赴いた動機が主として宗教的なものであった、ということについては、当時のドイツ側の史書も述べているところである。この時期のドイツ・ポーランド関係について最も詳しい事情を伝えている『メルセブルクの司教ティトマルの年代記』 *Thietmari Merseburgensis Episcopi Chronicon*（以下、『ティトマルの年代記』と略記）は、ゲニエズノの会見を次のように描いている。

「次に、神は御自ら愛された殉教者アダルベルトゥスを通して奇跡を成し遂げられたのであるが、皇帝はこの奇跡のを知ると、祈りを捧げるためにかの地に急いだ。ラティスボン（レーゲンスブルク）に着いた時、その地の大聖堂の司教ゲプハルドは大いなる敬意を持って迎えに出た。皇帝には、パトリキウス（の地位）のジィアゾン、オプラティオナリウス（の地位）のロベルトスおよび枢機卿が随行した。いまだかつてローマ皇帝で、これ以上の豪華な陣容でローマを出発した者はいなかったし、（このような陣容のまま）ローマに帰還した者もいなかった。……イェルアと呼ばれる場所で、ボレスラフは前もって皇帝のための宿舎を用意していた。その時どのようなやり方でボレスラフが皇帝を迎え、自分の国を通してゲニエズノまで案内していったか、私はそれを信じることもできないし、語ることもできない。オットーは、自分が待ち望んでいた都市を見ると、祈りながら素足でその場所まで歩いていった。この地の司教ウンゲルは、皇帝を恭々しく出迎え、教会まで案内した。その教会で皇帝は涙を流し、キリストの恩寵を受け取ることができるように、聖なる殉教者の執成とくせいを懇願した」。

“Postea cesar auditis mirabilibus, quae per dilectum sibi martyrem Deus fecit Aethelbertum, orationis

gratia eo pergere festinavit. Sed cum Ratisbonam veniret, a Gehehardo, eiusdem aecclesiae antistite, magnifico honore susceptus est, comitantibus secum Ziazone tunc patricio et Robberto oblacionario cum cardinalibus. Nullus imperator maiori umquam gloria a Roma egreditur neque revertitur. in loco, qui Iua dicitur, suimet hospicio, multum hilaris occurrit. Qualiter autem cesar ab eodem tunc susciperetur et per sua usque ad Gnesin deduceretur, dictu incredibile ac ineffabile est. Videns a long urbem desideratam nudis pedibus suppliciter advenit et ab episcopo eiusdem Ungero venerabiliter susceptus aecclesiam introducit, et ad Christi gratiam sibi impetrandam martyris Christi intercessio profusis lacrimis invitatur." (*Thietmar*[14], *Liber* IV. 44. 45.)

* ティトマール Thietmar はメルセブルグの司教でザクセン朝の年代記者として著名である。九七五年、ヴァルベック Walbeck 氏族 (ザクセン東部の旧家) のジグフリード伯 Graf Zygfrid とスターデ伯の子クネグンド Kneunda の子として生まれる。はじめクフェドリントブルグで教育を受け、九八七年から三年間マゲデブルグの聖ヨハネ修道院に入る。ついでマゲデブルグ大聖堂付の修道僧学校に入る。その時の学友に、後のオットー三世の側近の一人となり、聖アダルバルトウス伝の執筆者となったクフェルトの聖ブルーノがいる。一〇〇〇年には、マゲデブルグの大聖堂参事会会員となり、翌々年には祖父伝来の地ヴァルベックの修道院長となっている。オットー三世の没後、一〇〇四年にマゲデブルグ大司教タギノ Tagino との接触を通じて皇帝の宮廷にも入り、一〇〇七年のハインリッヒ二世のポーランド出征には、大司教とともに従軍している。一〇〇九年メルセブルグ司教となり、一八年に同地にて没する。ティトマールの政治的態度は、オットー三世の親ポーランド的政策に批判的であり、キリスト教国であるドイツと異教徒であるルツィツィ族 Luty (オドラ・エルベ下流に住む西スラブ族) との同盟を進めるハインリッヒ二世の政策を支持している。年代記は八巻からなり、主としてザクセン王朝の歴史を扱い、またドイツ東部の十世紀から十一世紀にかけての政治史、とりわけポーランドも含めた西スラブ族との交渉を詳しく叙述している。一〇一二年から没年まで書き続けたが、死によって叙述は未完成のまま残された (*Wesep Kronika Thietmar*[14], および SSS. I. 6. s. 74)。

さらにはほぼ同時代に書かれた『クフェドリンプルグの年代記』 *Annales Quedlinburgenses* もまた同様に、ゲニエズノ訪問が皇帝の宗教的熱情から出たものであることを示している。

「皇帝は、『まず神の国を求めよ』という聖書の言葉を忘れず、祖父伝来の皇帝家の流儀にならい、また王や上流人士に慈悲を求める宗教上のあらゆる要請に従って、己を低くしてスラブの地に身を献げ近頃キリストに倣って月桂冠を授けられた聖アダルベルトゥスのもとに赴き、彼の執成^{もつと}を熱心に懇請した。その地でスラブ人の君主ボレスラフ公によって心からの歓待を受けた。至るところから入念に集められたあらゆる種類の財宝を贈られたけれどもその時には何も受け取らなかった。なぜなら、彼の地に赴いたのは、奪い取るためでなく、与え祈るためだからである」。

“Ille vero evangelici non immemor praecepti, quo dicitur : *Primum quaerite regnum Dei*, iuxta morem parentum suorum imperatorum, omnia sua divina regi ac meliorari exoptans clementia, humili devotione in Sclaviam sanctum Adalbertum nuper pro Christo laureatum adit, eiusque interventum obnixius petit. Ibi summo conamine a duce Sclavonico Bolizlavone susceptus, xenis omni^{geni} census ubique terrarum studiosissime quaesiti obsequialiter donatur; licet nihil tunc temporis ex his acceperit, quippe qui non rapiendi nec sumendi, sed dandi et orandi causa eo loci adventasset.” (*Annales Quedlinburgensis*. [3] s. 77)

* 東部ザクセン地方、スラブ族の領地に近い都市クフェドリンプルグにおいて書かれた『クフェドリンプルグ年代記』 *Annales Quedlinburgensis* は、九九〇年、あるいは一〇〇七年に書き始められたとされている。はじめの部分は、『ヒルデスハイム年代記』 *Annales Hildesheimenses* に依っているけれども、九九三年以降の記事は、オリジナルなものである。著者は、

ティトマールとは逆にオットー三世の教会政策、親ポーランド外交を擁護し、オットー三世の後に皇帝に即位したハインリッヒ二世の政策を批判している。この年代記は、とくに西スラブ族の歴史にとって極めて重要な資料となっており、九九四年の反乱、九九五年、九九七年のサクセン族への攻撃、九九五年のオボジツツィ族ヴィエレッツィ族へのドイツ人による討伐、九九六年、一〇〇〇年、一〇〇二年のドイツ・ポーランド関係の記事に詳しい。この時期の資料としては、ヴァイドキンド、ティトマールと並ぶ第一級の文献であるといわれている。(SSS. t. I. s. 31)

以上の紹介から見られるように、ポーランドの史書もドイツの史書も、異教僻遠の地プルシアで殉教した聖アダルトゥスの墓参りが、オットー三世のグニエズノ訪問の基本的動機であった、と述べている。それでは、これまでに皇帝の心を捉えたときれる聖アダルトゥスとは、いかなる人物であったのか、高位聖職者たる司教身分とはいえ、一聖職者の死が当時の最高権力者をしてかくも遠隔の地まで赴かせたという事態は、どのような事情のもとで可能となったのであろうか。

聖アダルトゥスの伝記については、九九七年の殉教後数年のうちに四つの伝記が書かれたし、また中世ヨーロッパに流布したヴォラギネの『黄金伝説』*Legenda aurea* のポーランド版には、これらの伝記を基として無名の作家によって書かれた聖アダルトゥス伝が伝えられている。今これらの伝記が描いている聖アダルトゥスの生涯の軌跡をたどってみると、ほぼ次のような像が浮かび上ってくる。^{*}

^{*} 聖アダルトゥスの四つの伝記については、拙稿「ポーランド最古の年代記―『匿名ガルの年代記』について―参照。『黄金伝説』は、いうまでもなく十三世紀末イタリアのジェノヴァ大司教ヤコプス・ア・ヴォラギネによって執筆・編集されたラテン語の聖人伝集である。この『黄金伝説』はただちに全ヨーロッパに普及し、中世を通じて『聖書』に次いで最もポピュラーな書としての地位を占めたといわれており、事実、十三世紀末、すでにポーランドにまで流布し、ポーランドの幾人かの聖人伝を追加して編集された。聖アダルトゥス伝はその追加編の冒頭に置かれている。Jakub de Voragine, *Złota Legenda* wyd. Tłum. Janina Pleziowa, wstępem Marian Plezia, Warszawa 1983, s. 535—546.

九五六年、アダルベルトゥスは、ボヘミアの首都プラハの北西部からポーランドの国境にいたるまでの広大な領地を有していた大領主スウアヴニーク Stawnik の子として生まれ、スラブ語で「軍隊の喜び *wojska uciech*」＝ヴォイチェフ Wojciech としう洗礼名を与えられた。九七二年、ドイツのマゲブルグの聖マウリチウス修道院において勉強を始める。この時の教師の一人に、学識において聞こえていたオストリック Ostrik がおり、後にオットー二世の宮廷付司祭となっている。ヴォイチェフの竖振式にあたっては、時のマゲブルグ大司教アダルベルトゥスが、ヴォイチェフの家柄、その有為の才を知り、自分の名を与えた。

九八一年、卒業成ってボヘミアに帰り、司祭として聖職叙任の聖別を受ける。九九三年、プラハの初代司教ディトマル Detmar が没するに及び、ボヘミア公ボレスラフ二世その他の有力諸侯は一致して後任にヴォイチェフを選ぶ。その意向をうけてオットー二世は、イタリアのヴェローナにヴォイチェフを招喚し、プラハの司教職の受祿を許可し、司教杖を与え、監督の位置に立つマインツ大司教ヴィリギス Willigis が聖職叙任の聖別の儀式をとり行った。六年間、ヴォイチェフはプラハの司教職に在ったが、土地の聖俗諸勢力と対立し、九八九年司教職を辞してエルサレム巡礼の旅に出ることを決意し、まずはじめにローマを訪れる。ローマではオットー二世の妃テオファノから、オットー二世の冥福をエルサレムで祈るよう懇願され、巡礼の路用を贈られる。しかしローマを立ち、モンテ・カシノ山頂に建つベネデクト派修道院に立ち寄り、この修道院の一修道僧に訓戒され、エルサレム行きを断念する。ヴォイチェフは山を下り、著名なる隠修士聖ニル Nil と呼ばれるギリシャ人の学僧を訪れる。聖ニルは、ヴォイチェフにローマのアヴェンティノにある聖ボニファティウス修道院に入り、院長レオの教えの下に修業に勤しむことを勧める。ヴォイチェフは司教の衣を脱ぎ一介の修道士として五年間この修道院に籠る。しかしながら、九九四年、プラハから使節が来てヴォイチェフの帰国を懇請した時、法王はヴォイチェフに帰国を命ずる。一旦プラハに帰ったヴォイチェフは、ハンガリアへの布教をはじめ、諸々の聖職の任務に力を注ぐけれども、ボヘミアの人々の態度が豹変し、ヴォ

イチェフ排斥の空氣が醸成されていくのを知り、九九五年再びアヴェンティノの修道院の静寂の生活にもどっていく。九九六年、オットー三世のローマ皇帝戴冠の儀式にマインツ大司教とともに列席することがあったが、これを契機にオットー三世と三度親密な接触を持つにいたる。マインツ大司教は、再度ローマの司教会議でヴォイチェフのブラハ帰国を決定させるが、ヴォイチェフは、それに一つの留保条件を要請する。すなわち、ボヘミアの人々が、今後もお頑に心を閉しているならば、法王は、ヴォイチェフが他の異教の国々に布教に出ることを許可する、というものであった。法王がこの条件を認めたのでヴォイチェフはボヘミアへの帰国の旅に出る。しかし旅半ばにしてボヘミアの有力諸侯によって自分の一族郎党が滅亡の憂き目をみたことを聞き、プラハに入るのをとりやめ、ポーランドのグニエズノに赴く。その地でポーランド公ボレスラフの心からなる欲待を受け、翌年春、ヴィスワ川を北に下ってプルシアの地に入り、殉教する。

以上が、聖アダルベルトゥス（Ⅱヴォイチェフ）の生涯のおおまかな軌跡であるが、その中に一つの興味深い事実が語られている。西欧の辺境に位置するボヘミア出身のアダルベルトゥスは、ついに故郷に容れられず、ローマ参詣の中でアヴェンティノにあるベネディクト派の聖ボニファチウス修道院に入り、この修道院と深い関係を持つにいった、という点である。

ところで、このベネディクト派の聖ボニファチウス修道院は、当時のローマ宗教界に非常に大きな影響力を持っていたといわれている。アダルベルトゥスにアヴェンティノのこの修道院に入ること勧めた聖ニル自身名声ある隠修士であり、オットー三世の宮廷に出入りしている聖職者でもあった。またこのボニファチウス修道院の院長レオもローマ法王庁に影響力を行使できた、当時の宗教界の指導的人物であった。後にアダルベルトゥスへの熱烈な信奉者となり、聖アダルベルトゥス伝を書くことになるクフェフルトの聖ブルーノ Bruno von Querfurt、ポーランド最初の大司教となったアダルベルトゥスの弟ガウダンティ Gaudanty、ハンガリアの初代大司教となるアストリック

Asitryk もこのレオ膝下の修道僧であった。その上、この修道院が、オットー三世の居城近くに位置していたこともあって、オットー三世の宮廷とこの修道院の指導者層とは、極めて近い関係にあったことが注目されなければならない。レオがフランスのランス大司教任命問題で、地方司教会議およびカペー家の側に立つゲルベルト（後の法王シルベステル二世）を抑え、法王庁および皇妃テオファーンの意向を実現させるのに力を尽したのもこのような関係を示すものである*。

* オットー三世とその周囲をとりまく聖職者層との関連については、P. E. Schramm, *Kaiser, Rom und Renovatio*, t. I, Berlin 1929, s. 136-141, S. Zakrzewski, *Bolesław Chrobry Wielki*, Kraków 1925, s. 96-111. 参照。シエラムの見解においては、オットーの行動の宗教的動機が極めて重視されている。オットーの側近を形成した人物として、右で述べた他に、ギリシャ的なゲノーシス的・隱遁的禁欲生活の唱導者聖グレゴリウス、クリュニー修道院改革の中心人物オデロ、クリュニウの改革と隱修士的禁欲生活の結合を説く聖ロムアルドス、聖ブルーノに出自の点からも近いヒルデスハイムの聖ベルンハルト、聖ベルンハルトの兄弟タムモ、ウォルムスの教会法学者ブルハルトの兄弟フランコ、が挙げられている。シエラムは、オットー三世の時代は、クリュニウの改革運動の高揚と南イタリア的「ギリシャ」的隱修士的な僧院運動とが結合した教会活動の一大時期であったと主張している。

さらに、このような聖職者の薫陶もあって、オットー自身、隱修士的な生活に憧れ、单身異教徒改宗の旅に出ることを自分の使命と考える宗教的素質の持主であったことも史料が指摘するところである。聖アダルベルトゥスへの傾倒ぶりは、九九七年オットーがアーヘンにあってアダルベルトゥス殉教の報を知るや、直ちに殉教者記念の修道院をアーヘンに、イタリアのスピスコ、ローマには教会を建立する決定を出していることから窺うことができる*。

* 『五人の修道会士の伝記』 *Vita quinque fratrum* (MPH t. VI, s. 392) に於いて、オットーがラベンナ

に滞在していた時、聖ロムアルドスに自らの思いを述べた箇所が記されている。「今この時、神と聖人達に誓っている。三年後……財産を分け与えて、身一つの裸で、心をこめてイエス・キリストに従うつもりである。」*“Ex hac hora promitto Deo et sanctis eius ; post tres annos, … expensa pecunia, … tota anima nudus sequar christum.”*

先に紹介した聖アダルベルトゥスの生涯の軌跡において、なおもう一つ注目すべき点がある。聖人伝においてはアダルベルトゥスは、はじめてハンガリアへキリスト教を布教した人物として紹介され、また、ブルシア布教の権利をローマ法王から許可されている。この点は、当時のローマ法王庁の東欧への布教計画の一端を示すものと考えられなければならない。

九八九年、キエフ公ウラジーミルがビザンティン皇帝バシレオスの妹アンナと結婚し、ギリシャ正教圏に入ったことは、ビザンティンと教線拡大を競うローマ法王庁にとって極めてゆゆしき事態であった。従ってローマ法王庁にとってアダルベルトゥスのハンガリア・ポーランド・ブルシア布教は、この関連において極めて時宜にかなった企てであった。アダルベルトゥスが九九七年にブルシア布教で殉教した直後ただちに彼の列聖化の手続きがはじまり、おそらくとも九九九年の冬には完了していたと伝えられている (Zakrewski ⑤ s. 115)。また法王シルヴェステル二世は九九九年にはすでにボレスラフ・フロブリの教会建設についての嘆願書に応ずるべく、ポーランドに聖アダルベルトゥスの名を冠した大司教座設置の回勅を出し、アダルベルトゥスの兄弟ガウダンティ Gaudanty を第一代のゲニエズノ大司教に任命している。またハンガリアについても、一〇〇一年、ハンガリアのステファン Stefan (イイシュトヴァーン) に王位を認め、オスチホーム Ostryhom に大司教座を設置することを許可している。一〇〇〇年前後は、まさしくローマ法王庁にとって、ギリシャ正教との対抗を念頭に置いた東欧への教線拡大の西期であった。その点から考えるならば、オットー三世のゲニエズノ慕参は、ローマ法王庁にとってはすでにシルヴェステル二世が認めたゲ

エニズノ大司教座設置』ポーランドの教会組織の確立を実現させる機会となったのであり、また、さらに広くスラブの地に布教を進めていく絶好のチャンスの意味したのである。

第二章 ポーランドにおける教会建設

以上に述べたように、当時の年代記・文書から、オットー三世のゲニエズノ募参には、オットーのアダルベルトゥスに対する個人的な傾倒に加えて、オットー側近の宗教的サークルの影響、さらにローマ法王庁の東欧への教線拡大の計画が与って大きな力となっていたことが窺えるのであるけれども、ともかくも、このようにして実現したオットーのゲニエズノ訪問によって、ポーランドはじめて「独立」の教会組織を持つことができた。この点は『ティトマルの年代記』も確認しているところである。

「彼（オットー三世）は、即座にここに大司教座を設けた。それは合法的なやり方で、と思うけれども。とはいっても前に述べた司教の合意を得ることなく、そうしたのであるが。というのは、この地方はこの司教の管轄下にあったからである。（オットーは）この地域を殉教者の兄弟ラジムに任せ、彼にザルツホルベルクの司教ラインベルススを、クラコフの司教ポッポを、ヴラティスラフの司教ヨハンを従わせた。ポズナニの司教ウンゲルは彼らとは別であった。そして祭壇を設けてそこに聖遺物を安置した。」

“Nec mora, fecit ibi archiepiscopatum, ut spero legitime, sine consensu tamen prefati presulis, cuius diocesi omnis haec regio subiecta est, committens eundem predicti martyris fratri Radimo eidemque subiciens Reimerum, Salsae Cholbergensis aeclesiae episcopum, Popponem Cracuaensem, Iohannem

Wrotizlaensem, Vungero Posnaniensi excepto ; factoque ibi altari sanctas in eo honorifice condidit reliquias." (*Thietmar* [14], *Liber* IV. 45)。

ここでいうラジム Radim とは、アゲルベルトゥスの兄弟ガウデンティのことであり、ここにこのガウデンティ大司教の下に、ザルツホルベルク Salsae Cholbergensis すなわち西ボモージェ地方はバルト海沿岸の中心地コウブジェグ Kolobrzeg、クラコフ、ウラティスラフ Wrotizlaens すなわちヴロツワフ、の三つの司教区が従属する一つのまとまった教会組織の設立が認められたのである。

ただしこのティトマールの叙述には若干の注釈が必要であろう。ティトマールにおいては、ゲニエズノへの大司教座設置は、ただもっぱらオットー三世の命によるとだけ記されているけれども、同時代の資料からも明らかなように、この処置は皇帝と法王とポーランド公の意志という三つの要因によつてはじめて実現されたものであった。『ヒルデスハイム年報』は次のように述べている。

「皇帝オットー三世は、四旬節に、聖職者であり殉教者となった聖アゲルベルトゥスに祈りを献げるためにスラブの地に赴いた。その地で、司教会議を召集し、七つの司教区の秩序を定め、福者アゲルベルトゥスの兄弟ガウデンティを、ローマ法王庁の許可とボヘミアのボレスラフの懇請によつて、スラブ人の首都ブラハの大司教に任じた」。

“Imperator Otto tertius causa orationis ad sanctum Adalberdum episcopum et martirem quadragesimae tempore Slaviam intravit. Ibiq[ue] coadunata synodo episcopia septem disposuit, et Gaudentium, fratrem beati Adalberti, in principali urbe Sclavorum Praga ordinari fecit archiepiscopum, licentia Romani pontificis, causa petitionis Boleslavoris Boemiorum ducis.” (*Annales Hildesheimenses* [2] s. 32.)

前節で述べように、すでに九九九年に法王シルヴェステル二世は、ボレスラフの要請にもとづいて、ポーランドに新たに三つの司教区とその上に立つ一つの大司教座の設置を認めていたのであり、ゲニエズノ訪問はそれを現実に施行する機会となったのである*。

* この『ヒルデスハイムの年報』において、ガウダンティはブラハの大司教に任じられた、となっているが、これは言うまでもなく誤記である。ブラハには当時まだ大司教座は置かれていないからである。また「七つの司教」が言及されているけれども、この点については、一九世紀のオーストリアの歴史家であり、ポーランドの文献学の先駆者でもあるザイスベルクの見解に従うと、ゲニエズノ、クラコフ、コウオブジエグ、ヴロツワフ、ポズナニ、ミシニ（マイセン）、ブラハの七つの教区を意味し、オートーは、これらの教区の管轄範囲について調停し、境界を設定した、と解されている。確かに、一〇〇〇年以前においては、ポーランドはその全域がポズナニ司教の教区とみなされていたし、ヴロツワフ、クラコフの教区は一部、ブラハの管轄下にあったからクラコフ、ヴロツワフに司教座を置くことになると、ミシナ、ブラハの司教区と教区の領域について調整が必要となってくるからである。H. Zeisberg, Otto III und Boleslaw. I von Polen, in: *Zeitschrift für d. österr. Gymnas.* 1867. V. Heft.

またティトマルの記述において、オートーのゲニエズノ大司教座設置は、「前に述べた司教」の合意を得ることなく強行されたもの、となっているけれども、この点についても留保が必要となる。

教会法においては、新しい司教区単位を創設する場合には、それ以前に当地域の管轄権を持っていた司教の同意が必要となり、それは厳格に実行されていた、といわれている。ゲニエズノに大司教座を設定することは、当然、以前ポーランド全体を管轄下に置いていたポズナニ司教の同意なしには遂行され得ない事柄である。この点に注目して従来多くの研究者は、ティトマルの叙述（『司教の同意を得ることなく』）は、ティトマル自身の考え方の投影であり、事実上、ウンゲルはゲニエズノの大司教座設置に反対しなかったのだ、と主張するにいたっている（W. Abraham⁵⁵, Z. Wojciechowski⁵⁶）。すなわち、ティトマルにおいては、そもそもポズナニの司教はマゲデブルグ大司教の副監督 *Suffragan* であって、マゲデブルグの管轄下に立つものであると考えられており（*Thietmar*

[14] *Liber* 66)、マゲデブルグは、ポーランドに独立した教会組織の設立を承認しようとしなかったのであるから、ウンゲルもまた、グニエズノの決定に不同意であった、と考えられているからである。

しかしながら、そもそもポーランドのキリスト教改宗にあたっては、九六六年ミェシコの改宗により、九六八年はじめてボズナニに司教座が置かれたのであるが、この司教座はローマの法王庁に直属する布教担当司教座 *episcopus gentium* ともいべきものであり、二年後に設置されたマゲデブルグの大司教座の管轄区域に入らないものであった。この点は、後のポーランドの教会史・国家史の特質を考えるうえで決定的な事柄である (*SSS. t. I. s. 120. t. 6. s. 264*)。ポーランドの教会が迎った道とは正しく対照化であったのはチェコの教会であった。同じ西スラブ族であるチェコ人においては、プラハに九七三年に司教座が置かれることになるのであるが、この司教座はドイツのマインツ (モグンツィ) 大司教の管轄に服するものであった。アデルベルトゥスが絶えず、マインツ大司教の意向に沿わねばならなかったことは先にみたとおりである。

今や、ポーランドにおいてローマ法王庁の直接の監督下に立つ「独立」のグニエズノ大司教座が設置された。そしてそのことは、ボズナニ司教をマゲデブルグ大司教に服するものと考えているティトマールにおいても明確に承認されるにいたったのである*。

* ウンゲル *Unger* については今日までよくわかっていない点が多いのではあるが、おそらくドイツ人であろう、とされている。しかしウンゲルなる名をドイツの文献で見出すことが困難なことから、彼の出身をイタリア、あるいはバルカンとする説も出されている。しかし、九九二―三年に、初代ボズナニ司教ジョルダン *Jordan* の後継者としてポーランドに入ったことは確認されている。一〇〇〇年のグニエズノ大司教座設置にあたっては、その決定に同意を与えつつも、自らの教区はグニエズノから独立した地位に立つものであることを承認されている。ティトマールの叙述による大司教座設置へのウンゲルの不同意なるものは、一〇〇四年、ウンゲルがローマに赴く途中、マゲデブルクに監禁され、ポーランドの教会組織のマゲデブルグへの従属を強要されたという事件から導き出された、ティトマール自身による自己主張の表現である、と考えられている。ちなみに、こ

の強要されたウンゲルの表明は、十一世紀、および十二世紀において、マグデブルグがポーランド教会に対する自らの監督権を要求した時の根拠となっている。ウンゲル自身の態度については不明な点が多いけれども、親ポーランド派のクフェルトのプリーノが、ウンゲルを「非常に有徳な」人物と呼んでいることから、ウンゲルはボレスラフの政策に好意的であった、とする説が立てられている。一〇一二年ドイツに没する (SSS. I. 6. s. 264; Thietmar[14]. Liber. IV. 45.)。

第三章 聖マウリチウスの槍

以上述べてきたように、一〇〇〇年のゲニエズノ会見で、ポーランドはドイツから「独立した」教会組織を設立することに成功した。しかしながらこのことは、政治的にもポーランドのドイツからの「独立」を意味することになるであろうか。

『匿名のガル年代記』の記述によれば、ボレスラフ・フロブリはポーランドにおいても、またポーランド周辺の異教の諸民族においても、皇帝が持っていた教会支配権を手に入れ、皇帝を介せず、直接にローマ法王庁とポーランド聖職者層とを結びつける唯一の仲介者となった。それでは、このことによってボレスラフの政治的位置はいかなる意義を持つことになったのであろうか。この点についても他ならぬティトマールは、彼の年代記の中で次のように述べている。

「今の世の人々と祖父たちとを比較することは、何と不愉快なことであらうか。卓越した人物オドの生きた時代には、(ボレスラフの)父ミェシコは、オドを見ると敢えて毛皮の服を着たままでは家の中に入ろうとはしなかったし、オドが席から立つ時には、敢えて腰をおろしていることはなかった。神よ、皇帝が貢納を負う者を主人 Dominus にし、これ程までに高い地位に引き上げたことに對して御寛容を賜りますように」。

“Quam inique comparandi sunt antecessores nostri et contemporales ! Vivente egregio Hodone pater

istius Misico domum, qua eum esse sciebat, crusinatus intrare vel eo assurgente nunquam presumpsit sedere. Deus indulget imperatori, quod tributarium faciens dominum ad hoc unquam elevari.” (*Thietmar*[14], *Liber V*, 10)°

この文章は、一〇〇二年に没したオットー三世への追憶としてグニエズノの会見に触れたものである。この箇所に記載されているようにボレスラフが皇帝に対して貢納を負う者であったかどうかは、今は詳しくは触れないとして、皇帝はボレスラフを主人(ドミヌス dominus)とした、とティトマールは述べている。*

* ボレスラフが皇帝に対して貢納を負う者であったか否かについては、ティトマールの九七二年の記述の次の箇所が引き合いに出される。「尊敬すべき辺境伯ホドは、軍勢を集めて、皇帝に対して忠誠を誓いヴァルタ川までの貢納を払っていたミェシコを討つた。」*Inter ea Hodo, venerabilis marchio, Misiconem imperatori fidelem tributumque usque in Vurta fluvium solventem exercitu petivit collecto.* (*Thietmar*[14], *Liber II*, 29.)°。ボレスラフ・フロブリは九六六年(または九六七)年にミェシコの地位を継いでポーランド公に即位しているのだから、多くの論者は、このティトマールの叙述を基に、ボレスラフは一〇〇〇年まで皇帝に対して貢納を支払っていた、と考えている。問題は、どのような領地の貢納に対する貢納であるか、であり、ヴァルタ川(オドラ川の支流でボズナニを貫流する)左岸(ヴァルタ川の東方)と解して、ポーランド全域に對してボレスラフは貢納を負っていたとする論者もいる。バルトルド E. G. Barthold、ザイスベルグ H. Zeisberg、ヴェルシェ C. Wersche、ブラックマン A. Brackmann、ラント E. Randt、アウビン H. Aubin、ルダト H. Ludat 等ほとんどドイツ人研究者が名を列ねている。またヴァルタ左岸ではあるが、その貢納を負っている領域をもっと狭く限定して(例えばノテツ河口からオドラ川まで、とか、ヴァルタ川とオドラ川の接点付近の地域とか、ルブシの地域とか)いる論者もいる。マウエツキ A. Małeckie, グロデツキ R. Grodecki, クロス S. H. Cross, ザグジェフスキ I. Zakrzewski, アーノルド S. Arnold, ラブーグ G. Labuda, ブリュクナー A. Brückner°。それに対してヴァルタ川右岸(西方)を主張する論者には、ザグジェフスキ S. Zakrzewski, ヴィダイエヴツ J. Widajewicz, ヴォイチェホフスキ Z. Wojciechowski, テドリツキ M. Z. Tediński がいる。とくにヴォイチェホフスキは、貢納を負う地域を西ポモージェ全体に広げている(論文末尾の文献リスト参照)。

では、このドミヌス dominus とは、何を意味する語であろうか。中世ラテンの用法においては、それは第一に家の主人、第二に王、または皇帝、第三に封建領主（特に重罪裁判権 haute justice を持つもの）、第四に高位聖職者、第五に市長、を意味する (*Corpus Christianorum Lexicon Latinitatis Medii Aevi*, Turnholt 1975)。

それでは、オットー三世は、『匿名のガル年代記』が書き記しているように、ボレスラフに確かに王位を授与したのであるか。それともローマ帝国内での特殊な高位身分を与えたのだろうか。それとも普通の高位封建領主の一位階を認めたにすぎないのであるか。今日まで、この点について多くの見解が出されている*。

* ゲニエズノにおけるボレスラフの地位を、(1)封土を授与された封臣と考える論者にはスタシンスキ J. Stasiński、また皇帝と人格的な忠誠関係だけで結ばれた封臣と考えるザイスベルグ H. Zeisberg、ローベル R. Röpell、ヴェルシェ K. Wersche がいるけれども、今日では多くの支持を得ていない。(2)ボレスラフはゲニエズノで王位に即位した、とする説を主張する研究者にはナルシェヴィッチ A. Naruszewicz、バンドキエ J. S. Bandkie、シャイノーハ K. Szajnoch、ドラゴン M. Dragon、レレヴェル J. Lelewel、マウエツキ A. Malecki がいる。(3)ボレスラフのゲニエズノでの王位戴冠を認めるけれども、それは十全のものでなく、教会による聖別を欠如した部分的（従って世俗的なレベルにとどまる）な戴冠であった、と主張する研究者には、ウ・ジンスキ M. Łodyński、グロデツキ R. Grodecki、アーノルド S. Arnold がいる。(4)さらに『匿名のガル年代記』の記述は、皇帝によるボレスラフへの王位戴冠の資格授与を意味しているとする見解がある。この見解によれば、オットーはゲニエズノからの帰還の後ボレスラフの正式の王位戴冠を準備した、と考えることとなる。一〇〇一年の四月にアストリク Astryk なる僧がポーランド王の使節としてバンナに皇帝を訪ねていくけれども、これをポーランド公への王冠授与に関する使節と考えることとなる (S. Zakrzewski, 同 s. 135-140)。この見解に立つ人々には、ザグジェフスキ S. Zakrzewski の他に、デーディック B. Dudik、ラーヴェル K. Raver、ティムニェツキ K. Tymieniecki、ラブダ G. Labuda がいる。(5)さらに後述するようにボレスラフはパトリキウス Patricius に任じられた、とする説がある。はじめてこの仮説を提示したのは、オーストリアのザイスベルグであるが、さらにドイツ・ポーランドの研究者の中にも支持が相ついで生まれた。ボブジンスキ M. Bobrzyński、スタドニツキ K. Stadnicki、ブラックマン A. Brackmann、エルドマン C. Erdmann、ステンゲル E. E. Stengel、イエドリツキ M. Z. Jedlicki、ヴァイチェホフスキ Z. Wojciechowski、カンシニェク R. Gansiniec。総じて、ドイツの研究者はボレスラフの

地位をドイツ皇帝の封臣とみる傾向にあるのに対して、ポーランド側の研究者は、ドイツ皇帝の支配から脱した地位（王またはパトリキウス）を主張する傾向にある。現在のポーランドの法制史家バルダフは、両者の見解の対立を統一しようとして次のような説を立てている（J. Bardach, *Historia Państwa i Prawa Polskie*, ⑥ Warszawa, 1964, t. 1, s. 97）。すなわち、バルダフは、レーンがこの時期の社会・政治関係を律する基軸をなしていたのであるから、国家間の関係においてもレーン関係を反映したヒエラルヒシユな関係が成立していた、としたうえで、対内的レーンと対外的レーンとを区別し、対外的レーン関係においては、国家間のゆるい関係がみられる、と主張する。そしてこの対外的関係において皇帝はすべてのキリスト教国の君主の上位者であるが、その地位は権威的（権力的でなく）名譽上の（*prestiżowo-honorowy*）ものであった、とするのである。すなわちバルダフは、古代ローマのアクトリータス *Auctoritas* とポテスタス *potestas* の相異を、対外的レーンと対内的レーンにふり分け、皇帝の対外関係はアクトリータスに基くものであって権力的な強制関係を本来は含まないものである、と考えるのである。そしてその点からみて、ポーランドのボレスラフ一世、二世、三世の時代は、ポーランドはドイツに対して全く独立した地位を保持していた、と述べている（論文末尾の文献リスト参照）。

ところで、ボレスラフがゲニエズノの会見によってどのような世俗的地位についたか、を検討する時、他ならぬ『匿名のガル年代記』がまた一つの示唆的な記述を残している。

「（皇帝は）白らの冠を頭からはずして、それを友好的な同盟の印としてボレスラフの頭に置いた。次いで凱旋旗と交換にボレスラフに、主の十字架の釘と聖マウリチウスの槍を贈り物として彼に与えた。」

ここで挙げられている聖マウリチウスの槍の贈与という行為は、中世ヨーロッパにおいて極めて重要なシンボル行為であったことがすでに多くの研究者によって指摘されている。それではそもそもこの聖マウリチウスの槍とはいかなるものであるのか*。

* 聖マウリチウスとは、やはりヴォラギネの『黄金伝説』の中に登場する聖人の一人である。今その中に描かれている聖人像を

簡単に紹介してみよう。

マウリチウスなる人物は、古代ローマ帝国の軍隊の中で、「テーベの連隊」と呼ばれる一部隊の隊長である。この連隊の名は、テーベという名の都市からつけられたもので、連隊はその都市において編成されたのである。その都市はローマの東方にあって、豊かで果物と美樹に富み、均整のとれた体軀、武に長じて勇敢聰明なる住民を誇りとした。ナイルに面したその都は「テーベ百門の大都」として称えられた。

古代ローマ帝国にあっては、二七七年ディオクレティアヌス Diocletianus とマキシミアヌス Maximianus が権力を掌握した。彼らは版図内のキリスト教徒を根絶せんとして、全属州に指令を出した。「ローマの神々への信仰に立ち返れ！」と。しかしながらキリスト教徒は皇帝の使者に返事を与えなかった。皇帝は激怒して全属州に付令し、武装能力あるすべての男子をローマに集め、ローマに従わぬ者を討て、と命令した。この皇帝の布令はテーベにも達する。都市の人々は、「神のものは神に、カイザルのものはカイザルに」の神の言葉に従って六千六百六十六人の兵士を皇帝に送った。これらの兵士たちは、正義の戦においては皇帝を助けた。しかしキリスト教徒に対しては武器を取らなかった。

ディオクレティアヌス帝は、マキシミアヌスに大軍を与え、ガリアを攻めた。その時テーベの連隊もこのマキシミアヌスの指揮下にあった。全軍がアルプスを越えてオクトドルム Octodurn (ジュネーヴの近郊、後のブルグンド王国の一地方) に到着した時、皇帝は、従軍部隊の兵士に、ローマの神々に犠牲を捧げ、皇帝に敵対するすべての者、とりわけキリスト教徒を討つべし、という宣誓を強要した。これを聞いたテーベの連隊は、本隊から数マイル程離脱し、ロダヌ川の近くで陣を張った。マキシミアヌス帝はこれを知って使者を送り、命令に従うことを強要した。テーベの兵士達は帝の命令を拒んだ。怒った皇帝は「朕は朕に加えられた侮辱だけでなくローマの神々に加えられた侮辱にも復讐する」と叫び、再び使者を送って威嚇した。テーベの兵士たちは喜んで刀の下に頭を置いた。その時マウリチウスは立ち上り、彼らに呼びかけた。「諸君らのすべてがキリストの信仰のために死の覚悟があることを知って私は嬉しく思う。しかし私は今、主がベトロに語った言葉を思いおこし、そのように行いたいと思う。『剣を鞘に収めよ』と。なぜならば、我々はすでに仲間の死体に取り囲まれているし、衣は彼らの血で赤く染まっているからである。彼らに続いて我等もまた殉教の死を遂げようではないか。皇帝が我等の答を聞かんと欲するならば、次の如く答えよう。『皇帝よ、我々は汝の兵士であり祖国を守るために武器を取った。我々には裏切りもなければ不安もない。しかしまたキリストの信仰を捨てることもない』」。この答を聞いた皇帝は全軍に命じて一人残らず殺戮するように命じた。この殉教が行われたのは二八〇年ごろといわれている。神の命によって彼らの多くはそこを逃げ出すことに成功し、あるいは他の国々に赴いてキリストの名を輝かし、あるいは立派な戦勝をあげることができた、といわれている。以上『黄金伝説』 *Złota Legenda, Wybór. Tłum. Janina Pleziowa, Warszawa 1983. の要約である。*

聖マウリチウスの槍については、十世紀における北イタリアの都市クレモンの司教リュウトブランド Lindbrand が『アンタポドーシス』 *Antapodosis* という書物の中で論じている。今、彼の描くマウリチウスの槍の説明書を紹介してみることにする。^{*}

* クレモンの司教リュウトブランドは十世紀初頭に生れ、九七二年に没している。北イタリアはロンバルディアの、王家との関係が深い有力家族の出で、青年時代、プロヴァンス伯で後にイタリア王となったユーゴ Hugo の、ついでベレンガル二世 Berengar II の宮廷にあった。九四九年、このイタリア王ベレンガルによってコンスタンティノープルの皇帝に大使として派遣された。後このイタリア王と不和になり、オットー一世の宮廷に入る。九六一年、オットー一世とともにイタリアに入り、その年彼の推挙により、クレモンの司教となった。オットー一世の指示により、オットー二世とビザンティンの皇女との結婚を取り決める目的で、九六八年再度コンスタンティノープルを訪れる。リュウトブランドの著作としては、(1)八八八年から九四九年までの北ヨーロッパの歴史を描いている『アンタポドーシス』 *Antapodosis* (2)オットー一世の初期イタリア統治を描いた『オットーの歴史』 *Historia Ottonis* (3)『コンスタンティノポリスへの使者の報告』 *Relatio de legatione Constantinopolitana* がある。

「この槍は、外見上からみてその新しい様式、入念に作られた形姿において他の槍とは全く異っている。槍の尖頭の刃の中央部にランブムという窓（のような隙間）がある。次に、指に触れやすくするための、すこぶる美しい二つの留め金（縁）が少し盛り上った傾斜をもった中央部まで広く（巻かれて）いる。この槍は、生命力を与える十字架の発見者聖ヘレナの子、コンスタンティヌス大帝のものであったといわれている。先にランブムと呼んだこの槍の中央部には、我が主、救世主イエス・キリストの手と足を刺し貫いた釘から作られた十字架が付けられている。」

“Erat enim excepta caeterarum specie lancearum, novo quodam modo, novaque elaborata figura, habens

iuxta lumbum medium utrobique fenestrans. Hac pro pollicibus perpulcræ duae acies usque ad declivum medium lanceae extenduntur. Hanc igitur Constantini Magni, sanctae filii Helenae, vivificae crucis inventricis, fuisse adfirmant, quae media in spina, quam lumbum supericus nominavi ex clavis, manibus pedibusque domini et redemptoris nostri Jesu Christi adfixis cruces habet.” (*Lindprandi Antapodoseos* [11] s. 322.)

リウトプランドの説明書においては、この槍はドイツ王ハインリッヒ一世が時のブルグンド王ルドルフ二世から手に入れたものであり、以後、代々勝利をもたらす印として皇帝家の至宝となった、とされている。そしてさらに王が公や伯に与える通常の槍と異って、皇帝や王がその地位に即位する時の儀式に不可欠の装身具となり、いわば冠と並ぶ帝位・王位のシンボルとなった。この点は事実また多くの史書の確認しているところでもある。

一〇〇一年ハンガリアのステファン（イシュトヴァーン）が王に即位した時もこの槍が送られている。『アデマーの年代記』*Ademari Chronicon*（この文献については後述参照）は述べている。

「（聖ブルーヌスが）ハンガリアの王に洗礼を施した。彼はグウズGouzと呼ばれていたが、洗礼の時に名前を変えてステファンと呼ばれた。皇帝オットーは、初殉教者ステファンの記念日に行われた洗礼の際に、彼をもてなし、（拘束のない）自由な王国を持つことを彼に許し、皇帝のように聖なる槍を持ち運ぶことを彼に許し、また主の釘と聖マウリチウスの槍からなる聖遺物を贈り、その所有権を彼に認めた」。

“Regem Ungrie baptizavit, qui vocabatur Gouz, et mutato nomine in baptismo Stephanum vocavit, quem Oto imperator in natali protomartiris Stephani a baptisinate excepit, et regem ei liberrime habere

permisit, dans ei licentiam ferre lanceam sacram ubique, sicut ipsi imperatori mos est, et reliquias ex clavis Domini et lancea sancti Mauricii ei concessit in propria lancea." (*Ademari Chronicon* [1] s. 129-130.)

またマウリチウスの槍が帝位継承に不可欠の宝器であったことについては、『ティトマールの年代記』におけるオットー三世没後のエピソードが物語っている。

「皇帝の死に臨席していた人々は、この時、伝令によってあちこちに分散していた軍隊を呼び集める間、長い時間になたつてこのことを秘密にしておいた。ついで喪服の一隊が皇帝の高貴な遺体を運び出した時から七日間、間断なく続けられた恐しい戦争に耐えねばならなかった。というのは、ヴェロナに到着するまで敵は彼らに一瞬の平穩も与えてくれなかったからである。その地からアウグスブルク司教ジグフリードの、ポリニーと呼ばれる領土までやってきたとき、ハインリッヒ公が彼らを迎え入れ、哀悼の涙で彼らを感じさせた。ハインリッヒは一人一人を呼んで色々な約束を与え、自分を首長、王に選ぶように説得した。ついで、槍を除いて皇帝の遺体をその帝位の印とともに自分のものとした。この槍はすでに前もって大司教ヘルベルトが密かに抜きとっていたからである。この大司教はただちに捕えられ、自分の人質として弟を差し出し、聖なる槍を返却した時はじめて自由を得た」。

“Hii autem, qui extremis eius intererant, haec tam diu celabant, quoad exercitus undique tum dispersus per internuntios colligeretur. Tunc tristes turba dilecti senioris corpus comitata magnas bellorum asperitates VII dies continue perpessa est; nullaque securitatis certitudo ab hostibus concessa est, nisi tum dumtaxat, quando ad Bernam perveniunt civitatem. Exin cum ad Pollingun, curtem Sigifridi presulis

Augustanae, venirent, ab Heinricho duce suscepti lacrimis eiusdem vehementer iterum commoti sunt. Quos singulatum, ut se in dominum sibi et regem eligere voluissent, multis promissionibus hortatur ; et corpus imperatoris cum apparatu imperiali, lancea dumtaxat excepta, quam Heribertus archipresul clam premitens suam sumpsit in potestatem. Archiepiscopus autem custodia parumper detentus, relicto ibi pro vadimonio suimet fratre cum licentia abijt ac sacram mox lanceam remisit." (*Thietmar* [14], *Liber* IV. 50.)

大司教ヘルベルトは、槍を自らの手元に保持しておくことによって、王位継承候補者の間で仲介者の立場に立ち、この槍の返却に対して与えられる莫大な利益をあてにしていたといわれている。バヴァリア公ハインリッヒによるすばやい対応は、この槍が玉座への立候補者にとって不可欠のものであったことを示している。

ところで、このリウトブランドの描く聖マウリチウスの槍と同じ大きさ、同じ形態の槍が、今日までクラコフの王城バベル城内の大聖堂の宝庫に保存されている (*Kraków, miasto muzeów*. s. 21. ilustracje Num. 39)。*。また他方、代々皇帝の家系を通じて伝えられてきたもので現在ウィーンの博物館に保存されている槍があり、これもまたリウトブランドの描くマウリチウスの槍と形態、大きさを同じくしているものがある (*Deutsche Geschichte*. t. I. s. 371)。*。そして聖マウリチウスの真物の槍はクラコフ所蔵のものか、ウィーン所蔵のものかについて、今日まで多くの検討がなされてきたけれども、いまだに定説をみるに到っていない。

* クラコフ所蔵の槍こそ本物の聖マウリチウスである、とする立場を表明したのはブシエツキの研究である。A. Przewdzicki, *O wlozni św. Murycego w skarbcu krakowskim, Bibl. Warsz.* 1861. この見解を支持する研究者には、ザグジェフスキ S. Zakrzewski, ハウプト G. Haupt がいる。他方クラコフ所蔵のものは模造品だとする説は、オーストリアの歴史家ザイスベルグの他には、コペラ F. Kopera, ホフマイスター A. Hofmeister 等。一九七七年の美術書『博物館の都市、ク

ラコフ『Kraków miasto muzeów』は、模造品説を取っている。しかし、この書における解説者シャプロフスキ J. Szablowski は、精巧な模造品ではあるけれども確かに一〇〇〇年にオットーによって贈られた槍であり、代々ピャスト家の王位または大公位即位の儀式に使われた宝器であった、と述べている（論文末尾の文献リスト参照）。

しかしながら、このクラコフ大聖堂所蔵の槍が、一〇〇〇年にオットー三世がボレスラフに贈ったものであることはすでに広く確認されているところである。そこから、『匿名のガル年代記』の記述に信憑性を認めてオットー三世はボレスラフを王に任じた、とする見解が提出されてくるのである。

しかしながら、この見解には重大な難点が横たわっている。『ティトマールの年代記』はボレスラフの王位戴冠については全く沈黙したままであり、また当代のその他のドイツの史書は、ボレスラフを一〇〇〇年後も王 *rex* ではなく、公 *dux* と呼んでいる。さらにボレスラフに好意的な聖ブルーノも、一〇〇八年ごろ書かれた有名な『皇帝ハインリッヒへの手紙』 *List s. Brunona do Henryka II Cesarza*. の中でボレスラフのことを王 *rex* ではなく、公 *senior* と呼んでいる。『クフェドリンプルクの年代記』でも、ボレスラフは一〇〇〇年以後も公 *dux* と呼ばれている。そして特に注目すべきは、この年代記において、一〇二五年にポーランド公ボレスラフは王位を僭称した、と記されていることである。

「ポーランド公ボレスラフは、アウグスト・インクスター 尊厳者・皇帝ハインリッヒが崩じたと聞いて、塗油と戴冠を根拠もなく不当に要求する程、心が高慢となり心底まで傲岸不遜の毒で満ちあふれた」。

“*Bolizlawo dux Poloniae, obitu Henrici imperatoris angusti comperto, elatus animo viscere tenus superbiae veneno perfunditur, adeo et uncto etiam sibi imponi coronam temere sit usurpatus.*”
(*Annales Quedlinburgenses* [3], s. 90)°

そしてドイツ側の資料がボレスラフの王位を認めているのは、この一〇二五年の戴冠のみである*。

* はば同様の内容を『ザクセン年代記』 *Annalista Saxo*、『マゲデブルグ年代記』 *Annales Magdeburgenses* も伝えている。皇帝コンラッドの伝記作者ヴィボ Wipo も次のように書き記している。「スラブ人の公ボレスラフについて。上で述べた年（一〇二五年）ボレスラフ公は、コンラッド王を侮辱して王の印と王の名を自分のものとした。しかし彼の軽率な行為は死によってすみやかに空しくなった。"De Bolizlao duce Sclavorum. Eodem anno quem supra notavimus Bolizlaus Sclavigena, dux Bolanorum insignia regalia et regium nomen in iniuriam regis Chunradi sibi aptavit, cuius temeritatem cito mors exinanivit." (*Wiponis Gesta Chunradi II.* [15]). 法王庁が正式にボレスラフの王位を承認したという回勅が残されているわけではないけれども、ゲニエズノ大司教が戴冠の儀式を行った、ということ、この行為がローマ法王庁の意志に反するものではなかったとみなされている。ドイツ側もこの行為を黙認し、同年ボレスラフに続いて王位についた息子のミェシコを「王妃 regina」と呼んでゐる (*S. Zakrzewski* ⑤ s. 342, s. 422)。

それでは、もしボレスラフが一〇〇〇年の会見以後も依然として公の地位にとどまった、とするならば、この聖マウリチウスの槍の贈与は何を意味しているのだろうか。またこの槍の贈与とあわせてオットー三世が自分の冠をボレスラフの頭に置いたという行為はいかなる意味をもつものであったのか。

第四章 パトリキウス

グニエズノの会見について、はじめて本格的な研究を提示したのは、十九世紀中葉のオーストリアの歴史家ザイスベルグであるが、彼の研究以来、オットー三世のボレスラフに与えた呼称の意味が、呼称に使われた言葉の正確な理解を通して追求されてきた。再び『匿名のガル年代記』の文言を引用すれば、ボレスラフはオットー三世によって「ローマ帝国の兄弟、協力者 *frater et cooperator imperii*」に任ぜられ、また「ローマ人民の友・同盟者 *amicus et socius populi Romani*」と呼ばれた。

ところで、この「ローマ人民の友 *amicus populi Romani*」という言葉は、いうまでもなく古代ローマの共和政時代からすでに異邦の王侯に与えられた名譽の称号であり、その場合にはローマ皇帝とこの王侯との間には命令・従属関係は存在しないものと解されていた。また「同盟者 *socius*」というのも、ローマ以外の諸都市・諸地域がローマ帝国に編入される際、自らの国家的独立をほぼ完全に保障されるものであったと理解されている (E・マイヤー『ローマ人の国家と国家思想』岩波書店一九七八年 一八〇ページ以下)*。

* 「ローマ人民の兄弟 *frater populi Romani*」については、カエサル『ガリア戦記』*De bello Gallico* 第一卷三三節にその用例が見い出される。ここではガリアの小部族ハエドウィ族がローマと共通の祖先 (トロイヤ) を持つものと信じられていたために、この部族に「ローマ人民の兄弟」「ローマ人民の血縁者」なる呼称が与えられた、とされている。 (*De bello Gallico*, Loeb, s. 52.)

なお十世紀中葉ビザンティン皇帝コンスタンティノス七世ボルフェロゲネトスの編纂になる『ビザンティン宮廷の儀式について』*De cerimoniis aulae Byzantinae* の中では、「ローマ人たちの皇帝」の「兄弟」の中に西欧のキリスト教国の王が挙げられている (ザクセン、バイエルン、イタリア、フランス)。後述するように、オットー三世はこの書を念頭において自らの典

礼を作り、「ローマ人民の兄弟」なる語を使ったとする見解が出されている（渡辺金一『中世ローマ帝国』岩波書店一九八〇年、五八ページ）。

さらにこの「ローマ人民の友」という呼称は、中世ヨーロッパにおいて、古代ローマ帝国の再興を企図したカール大帝によって受け継がれている。たとえばイギリスのマーシアの王オッフア Offa に対して「親愛なる兄弟にして友 dilectus frater et amicus」なる呼称を与えている（*Aleuini epistolae. MGH. EE. 4. 131 nr. 87.*）。また『カール大帝伝』を著したアインハルトは、カール大帝の帝国に属していない王国や諸部族が「友人関係によって per amicitia」カール大帝と結ばれていた、と述べている。

「王は、幾つかの王や民族を友人関係を通して結びつけることによって、王国の栄光をさらに高めた」。

“Auxit etiam gloriam regni sui quibusdam regibus ac gentibus per amicitiam sibi conciliatis.” (*Einhardi Vita Karoli Imperatoris MGH SS. t. II s. 451.*)

ところで、オットー三世がまた「古代ローマ帝国の再興 Renovatio Imperii Romanorum」を熱烈に追い求め、その先駆者としてカール大帝を崇拝していたことはよく知られている。『ティトマールの年代記』は、オットー三世が古代ローマの慣習を再興し、カールへの崇拜のあまり、アーヘンに眠るカール大帝の墓を開くに至ったことを書き残している。

「皇帝は、殆どすべての土地から消えうせていた古代ローマの慣習を復活させようと願ひ、かずかずの業績を挙げ

たが、これについては様々な人々から色々な評価が与えられたところである。……彼はカール大帝の遺体がどこに眠っているか、その正確な場所に確信をもてなかったのであるが、彼がそこにあると見当をつけた場所を人知れずに掘り返して、国王の棺に納められた遺体が発見されるまで発掘することを命じた。」

“Imperator antiquam Romanorum consuetudinem iam ex parte magna deletam suis cupiens renovare temp-
oribus, multa laciebat, quae diversi diverse sentiebant. Karoli cesaris ossa ubi requiescerent, cum
dubitaret, rupto clam pavimento, ubi ea esse putavit, fodere, quousque haec in solio inventa sunt regio,
iussit.” (Thietmar. [14] Lieber IV. 47.)

こうしてオットー三世のローマ帝国再興のプランとの関連において「ローマ人民の友」という言葉もまた理解されなければならぬとする見解が提出されるにいたった。そしてこうした視点を最初に、包括的に展開した研究こそ、十九世紀中葉のオーストリアの歴史家ザイスベルグであった。

ザイスベルグは、まずオットーの師傳で後の法王シルヴェステル二世となったゲルベルトとオットーとの往復書簡に触れ、オットー三世のローマ帝国復興にあたっては、ギリシャ的ビザンティン的な宮廷・官位制度が一つの模範として構想されたと考える*。

* ザイスベルグが引用しているシルヴェステル二世^①ゲルベルトの手紙は次のようである。「聖なる法王は無力となり、ギリシャこそ皇帝の哲学とローマの権力を自慢することができ、とイタリア人が信ずることのないように。我々のローマ帝国に力を与えているものは、農産物豊かなイタリアであり、兵士を豊かに提供するガリアやゲルマニアであり、また強力なスキタイ帝国も我々には欠けていない。汝は高貴なローマの皇^②帝であり尊厳者である。汝は高貴なギリシャ人の血から生れた者である。汝こそ権力においてギリシャ人を凌駕し、相続によってローマ人を支配し、精神と雄弁において卓越した者である。」(Weisberg^③ s. 337) オットー三世のゲルベルトに与えた手紙においては、オットーの側からザクセンの粗野を軽蔑し、ギリシャ精神による

教育をほどこすようゲルヘルトに懇請してゐる (Gerberti epistola 153. *Historiae Francorum Scriptores II.* s. 824.)。

そしてこの点を明確に示しているものとして『黄金の都市ローマに関する書』*Graphia aureae urbis Romae* なる文献を挙げる。それではこの『黄金の都市ローマに関する書』とはいかなる書物であるのか。

この書物は三つの部分からなっている。すなわち(1)『ノアからロムルスまでのローマの歴史』*Historia Romana a Noe usque ad Romulum* (2)『ローマの都市の偉観』*Mirabilia urbis Rome* (3)『皇帝の宮廷の典礼』*Libellus de ceremoniis aule imperatoris* (以下この部分だけを『典礼書』と略記) からなっており、ほぼ十二世紀の中頃、フィレンツェで一冊の書物として編集された、といわれている (SSS. t. 2. s. 152. P. R. Schram. ③ t. 2. s. 68.)。そして各部分の成立については見解が分かれているけれども、とくに最後の『典礼書』については、一〇三〇年ごろ作成され、ローマにおけるオットー三世の宮廷の典礼を反映した内容を載せている、といわれている。ザイスベルグの表現を使えば、この『典礼書』は、オットー三世にとってのラテン版コンスタンティヌス・ポルフィロゲニトゥスであった。^{*}

* コンスタンティヌス七世・ポルフィロゲニッス *Konstantyn Porfirogenitus* (ポルフィロゲニッスとは緋室生れとの意味)。九〇五年に生れ、九一三年からアレクサンドル *Aleksander* 後ロマヌス *Romanus* と共同統治、九四五年から九五九年の没年まで単独でビザンティン帝国を統治する。ビザンティン文化のルネサンスの最もすぐれた代表者であり、同時に最も有力な保護者であった。青年時代、政治から遠ざけられていたので、研究に専心し、自らが多方面にわたる該博な知識の持主となつたといわれている。また優秀な学者の一団を組織して未曾有の資料編纂事業を興した。五三の項目に涉つたそれは、歴史、文化全般の事象に関わり、今日伝えられているものだけでも、(1)使節、(2)思想、(3)有徳と悪徳、(4)戦略、(5)作戦、(6)戦時の雄弁、が列挙できる。コンスタンティヌス自身の手によって作成された書には、(1)『軍管区について』*De thematibus* (2)『バシレウス伝』*Vita Basilii* (3)『帝国統治について』*De administrando imperio* (4)『ビザンティン宮廷の儀式について』*De ceremoniis aulae Byzantinae* がある。ザイスベルグが念頭においているのは、この第四の『ビザンティン宮廷の儀式について』である (SSS. t. 2. s. 464)。

ザイスベルグはとくにこの『典礼書』の第一九条「パトリキウスはいかに任命されるべきか *Qualiter patricius sit faciendus*」に着目する。以下この条文の全文を掲げる。

「それゆえ、パトリキウスの身分は、このようにして規則に従って与えられる。この身分は、地位の低い者、よく知られていない者に与えられるものではない。皇帝によく知られた者、信頼される誠実の人、聡明な人、高慢でない者でなければならない。親衛隊司令長官（プロトスパテリウス）が皇帝の前に来て肩に接吻するという。『偉大な皇帝よ、召喚された者が出頭します』。その時、皇帝の左方に、我々が軍司令官と呼んでいるイバルフスが立っている。そして皇帝は彼に『親衛隊司令長官（プロトスパテリウス）とともに未来のパトリキウスを連れて参れ』と命ずる。パトリキウスが参上する。最初に皇帝の足に接吻し、それから膝、最後に皇帝に接吻する。それからまわりのすべてのローマ人に接吻する。すべての人が叫ぶ。『汝に幸あれ、神によって我々に委ねられた統治は我々だけでそれを遂行するにあまりに荷が重い。汝を我々の補佐人とし、汝に次のような名譽を与えよう。すなわち神の教会と貧しき人々とに法を与え、古き法を明らかにするという名譽を』。こうして皇帝は彼にマントを与え、右の人差し指に指輪を嵌め、独特の筆蹟による銘の刻まれた木綿の布を与えた。そこには次のように記されていた。『慈愛に満ちた正しきパトリキウスであれ』。こうして彼の頭に黄金の冠を置き、彼を退席させる」。

“*Patricii ergo dignitas taliter disponenda est, quatinus illa dignitas non viii persone nec alicui concedatur ignoto, sit enim valde notus imperatori, sit fidelis et prudens, non elatus. Protospatharius veniens ante imperatorem osculetur suum humerum et dicat : Maxime imperatorum, adest, quem vocasti. Tunc stet ad sinistram imperatoris illius yparchus, quem nos dicimus prefectum, et dicat ei imperator. Cum protospathario futurum patricium adducito. Dum autem venerit patricius, in primis osculetur pedes*

imperatoris, deinde genu, ad extremum osculetur ipsum. Tunc osculetur omnes Romanos circumstantes, et dicant omnes : *Beneveniat. Nobis nimis laboriosum esse videtur, concessum nobis a Deo ministerium me solum procurare. Quo circa te nobis adiutorem facimus, et hunc honorem concedimus, ut ecclesiis Dei et pauperibus legem facias et ut inde apud altissimum iudicem rationem reddas. Tunc induat ei mantum et ponat ei in dextra indice anulum et det ei bambacium propria manu scriptum, ubi taliter contineatur inscriptum ; *Esto patricius misericors et iustus. Tunc ponat ei in caput aureum circulum et dimittat eum.*" (Schram. ② t. 2. s. 103.)*

ザイスベルグは、パトリキウス叙任式ともいうべきこの条文を、一〇〇〇年のグニエズノ会見の諸事実と対比し、その類似性を指摘する。

(1) 一〇〇〇年のグニエズノ会見の際、ティトマールは、オットー三世に随行した二人の高官、パトリキウスたるチアゾ Cizzo とオブラティオナリウスたるロベルト Robert を挙げているけれども、この二人はまさに『典礼書』に登場する二人の高官ブレフェクトゥスと呼ばれるイパルフスならびにプロトスパタリウスという高官に相当する*。

* オブラティオナリウスは、礼拝の際、法王の側にあつて副輔祭の役割を果し、法王に捧げられる供物に対して監督権を有していた。通常は法王側近の枢機卿が任じられた。イパルフス *Yparhus (Iparos)* とは騎兵隊長の意味であるが、ビザンティンの官職の中でいかなる役割を持ったのか詳らかでない。ここでは軍司令官の役 *prefectus* とされている。プロトスパタリウスとはスパタリウス（護衛者、小姓、宮廷官）の長。ここでは親衛隊長官と訳しておいたが定訳ではない。

(2) オットー三世とボレスラフとは一〇〇〇年以前に、西スラブ族討伐の戦においてすでに既知の間柄であつて、そ

の意味においてボレスラフは『典礼書』にいう「皇帝によく知られた者、信頼される誠実の人」という条件に合致する。
 (3) オットー三世はボレスラフに教会支配の権限を与えているけれども、『典礼書』においても皇帝はパトリキウスに、「神の教会と貧しき人々とに法を与える」権限を付与している。

(4) 『匿名のガル年代記』において、オットー三世はグニエズノの会見で、ボレスラフの頭に皇帝自ら冠を置いた。『典礼書』でもパトリキウスの頭に黄金の冠を置く、と記されている。

以上の諸点を検討してザイスベルグは、オットー三世はグニエズノにおいてボレスラフをパトリキウスに任じた、という説を立てるのである。「オットーは、ボレスラフにパトリキウスの地位を与えることによって、ギリシャ人たる母の宮廷においてまさに当時よく行われていたことを成し遂げたのである。彼の地コンスタンティノープルでは、パトリキウスは、皇帝が与える官職の中で、皇帝に次ぐ最高の位階であった。」(Zeisberg, ⑤ s. 342.) それでは、『匿名のガル年代記』の中にパトリキウスの名が明示されなかったのか。この問いに答えてザイスベルグは、いまだ当時のポーランドにおいては、オットーのビザンティン的な装について正確な知識が欠如していたためであると述べるのである。

このザイスベルグのパトリキウス説は、その後の研究の中でさらに詳細に検討され多くの支持者を得るにいたったけれども、その中で最も注目すべき見解を提示したのは、第二次大戦中ならびに戦後に多くの成果を発表したポーランドの歴史家 Z・ヴォイチェホフスキ Z. Wojciechowski である。今簡単に彼の説を紹介してみることとする。

ヴォイチェホフスキはまずオットー二世の「ローマ帝国再建 Renovatio Imperii Romanorum」の構想が生みだされた当時のヨーロッパの政治状況を考察する。

オットー二世が、ビザンティンとの協調を考え、自分の妃としてビザンティンの皇女テオファノを迎えたことはよく知られているが、このビザンティンとの協調路線は、オットー三世の初期の政治方針でもあり、オットー三世もま

たビザンティンの皇女との婚姻を計画するに至る。しかし九九七年ローマの大貴族クレスケンティウスがヤン・フィロガートスを新たに法王に立て、ビザンティンの後援を受けてオットーに対して反乱し、オットーの任命した法王グレゴリウス五世をローマから追放すると、オットーは同年冬から翌年九九八年にかけて再びイタリアに遠征し、この反乱を鎮圧する。ヴォイチェホフスキはこの時点でオットーはビザンティン帝国に対抗する「ローマ帝国の再建」を構想した、と考える。

ところで、オットーの再建されるべき帝国の構成についてよく引き合いに出されるのが、同年（九九八年）の春、ライヘナウにおいて作製された美しい手稿の福音書の献呈画（ミニアチュール）である（*Deutsche Geschichte* ⑧, t. I, s. 412-13）。この献呈画は、オットーが聖俗の高官に囲まれて一段と高い玉座に座り、四人の女の姿をとった四つの国民、ローマ・ガリア・ゲルマニア・スラブがオットーに忠誠を誓っている図を描いている。すなわちローマ・イタリア・ガリア・ゲルマニア・スラブがオットーの構想したローマ帝国の四肢を構成したのであるとヴォイチェホフスキは考える。

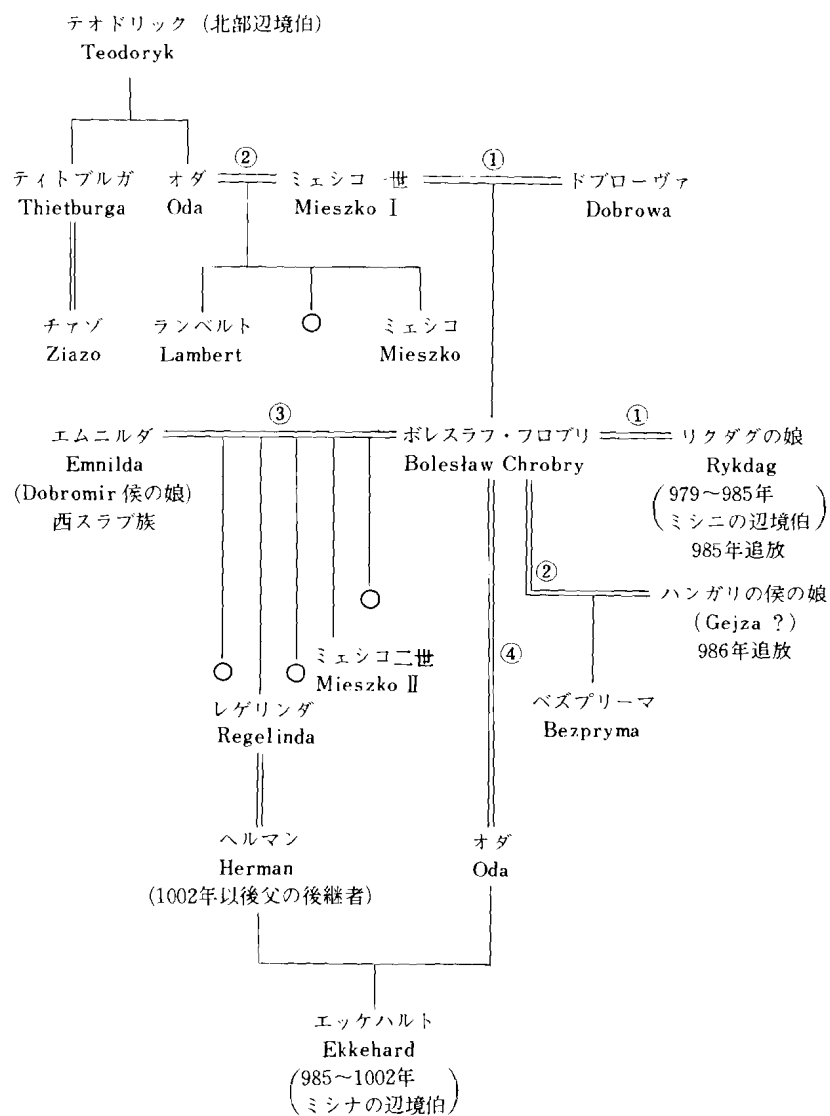
しかしながらその当時のヨーロッパの政治状況を見ると、この構想ははじめから重大な難点を蔵していた。すでに南イタリアはビザンティンの支配下にあり、シシリア・北アフリカ・ヒスパニアはサラセンの勢力下に置かれ、西欧の中心ガリアは、九八七年カペー朝の成立とともにオットーの帝国から離脱しつつあった。ヴォイチェホフスキは、このような政治状況のもとでは、オットー三世の再建されるべきローマ帝国の重心は北東ヨーロッパ（ポーランド・ザクセン・ハンガリア）に置かれざるを得なかった、と見るのである。

ローマ帝国の重心を北東部に置くという政策は第一に、ヨーロッパ北東部自体の政治的安定をもたらすだけでなく、第二に北東部へのローマ教会の手によるキリスト教布教を図り、ロシアを通じてギリシャ正教の拡大を阻止することとなり、第三に力の衰えつつあるブルガリアを圧倒してパンノニアに迫るビザンティンの攻勢をハンガリアを盾とし

で防ぐこととなり、第四にドイツの力をイタリア経営に集中させることを可能にする。

こうしたオットー三世の北東部重視の考え方を、ヴォイチェホフスキはオットーを取り巻く諸勢力の配置、とりわけ親オットー的な人脈の形成の中に探っている。以下ヴォイチェホフスキの見解を『ティトマールの年代記』の叙述を手がかりとして敷衍してみることとする（次頁の系図表参照）。

まず最初に注目すべきは九九八年、ローマでクレスケンチウスの反乱が鎮圧された時、オットー三世がパトリキウスに任じたのがチアゾなる人物であるが、彼はドイツ東部ザクセンの出身であり、その妻ティトブルガはポーランドのミェスコ一世の妻オダと姉妹の關係にあつた。オットー三世はこのチアゾをゲニエズノ墓参に随行させているが、オットーをその旅行中ミシニ（マイセン）で出迎えた人物エッケハルトは、東部ドイツの最大の有力侯ミシニ辺境伯であり、同時にオットーの最高の寵臣であり、オットー没後バヴァリアのハインリッヒと後継を争う者であつた。この点は『ティトマールの年代記』が詳しく述べているところである。ポーランドのボレスラフは、このエッケハルトの娘オダを自分の四番目の妻として迎え、さらに自分の娘レグリンダをこのエッケハルトの息子ヘルマンに嫁がせている。こうして東部辺境においてポーランドのボレスラフを含めたオットー側近の集団が形成され、帝国南部はチアゾ、北部はボレスラフが、それぞれ皇帝の代理人、そのパトリキウスとして統治の任にあたる、という構図が描かれるというのである。ヴォイチェホフスキの説はザイスベルグのパトリキウス説を政治史的考察によって補強しようとするものであつた、といえるであらう。



—= 結婚

『ティトマールの年代記』の
記述から作成

* パトリキウス *patricius* とは、古代ローマにおいて、プレベース *plebes* (平民) と対照させられて用いられた貴族を意味し、古くは元老院議員の別称でもあった (マイヤー、前掲書一六四ページ)。しかしこうした理解は一旦廃れ、新たにコンスタンティヌス大帝によって復活された時は、別様の意義を持つにいたった。すなわち、宮廷の高官や貴族の君主たちに与えられた名譽の称号となった。オドアケル *Odoacer* (ゲルマン出身の傭兵隊長、後イタリア王)、テオドリック *Theodoric* (東ゴートの王)、クロヴィス *Clovis* (フランク初代の王、メロヴィンガー朝の祖) のパトリキウス称号はそうした例である。パトリキウスは、その位階に固有の印の授与によって与えられる終身の名譽職であった。その任命のための儀式は、ビザンティンのコンスタンティヌス・ボルフィロゲニトゥスがその典禮書において定めた。パトリキウスの地位は、七世紀以降、プロコンスル (執政官代行) の地位と結びつき単に宮廷の位階制度における高い地位の占有を意味しただけでなく、国庫から支給される毎年の俸給を受領する権限を持つものであった。イタリアのビザンティン領においては、パトリキウスは七五一年までラベンナの総督に与えられた称号であった。七世紀から九世紀にかけて、この身分は、宮廷における大臣、その他の高官、また大軍管区の司令官 (主として小アジアの) に与えられるものとなった。こうした使用法が広がって、パトリキウスは属州の総督の俗称となっていた。ビザンティン帝国では、このパトリキウスの身分は、庇護国 (クリエンテス *Clientes*) の君主にも与えられた。十一世紀後半にはその重要性は薄れ、十二世紀には、ビザンティンの下級の官職がその名称をとるにいたった。四ヨーロッパにおいては、パトリキウスに軍司令官の権限が与えられたので、ビザンティン世界よりも大きな意義を持った。七五一年ビザンティンがラベンナの支配権を失ったあとでは、パトリキウスは、ローマ市と法王の保護者と見なされるようになった。七五四年、法王ステファヌス二世は、フランクの王ピピン *Pippin* を「ローマ人のパトリキウス *Patricius Romanorum*」に任じた。ピピンの息子とその後継者もこの称号を帯びた。カール大帝もまたパトリキウスの称号を名乗った。九六二年、オットー一世も、ローマで皇帝に即位する時、同時にパトリキウスの称号を名乗っている。オットー三世は、この称号を皇帝の代行者になるべき人物に与えている。すなわち、九九七年イタリア遠征に赴く前に、伯母マティルダ *Matilda* をパトリキウスに任じ、またイタリアで、チアゾをパトリキウスに任じている。SSS. I. 4. 9. 6. 渡辺金一「八九世紀初頭のビザンツ帝国とフランス王国」『正教世界の成立』(いずれも『岩波講座・世界歴史7』、一九六九年所収) 参照。

第五章 ボレスラフ・フロブリとカール大帝

ボレスラフがオットー三世のバトリキウスに任命されたとする説は、さらにオットー三世は、ローマ皇帝の後継者としてボレスラフを想定していた、とする説を生み出すこととなった。この極めて興味深い説は、ヴォイチェホフスキにも見られるところであるけれども、とりわけやはりポーランドの研究者であるS・ケンチシンスキが詳細に展開したところであった。以下彼の説を具体的な資料によって跡づけながら紹介してみることとする(S. Kęczyński, ⑤)。まずケンチシンスキはオットー三世とボレスラフ・フロブリとの関係が極めて親密なものであったとし、その証左としてオットーがボレスラフの子の名づけ親になっていることを指摘する。『ティトマルの年代記』は次のように記している。

「第三番目の妻は、尊敬されるべきドロミール侯の娘エムニルダであった。……彼女は二人の息子を生んだ。一人はミェシコという名で、もう一人は、父親が、自分の敬愛すべき君主の名前をとって名づけた」。

“Tercia fuit Emnildis, edita a venerabili seniore Dobremiro. ... Peperit haec duos filios, Misconem et alium, quem dilecti senioris sui nomine pater vocavit.” (*Thietmar* [14], *Liber* IV. 58)

この「自分の敬愛すべき君主」とは、オットー三世のことを指し、ボレスラフはオットー三世との友情を記念して自分の子供にオットーという名前をつけた、というわけである*。

* この点についても異論が出されている。ウィエロフスキ A. Bielowski¹⁾、ザイスベルグ²⁾ H. Zeisberg³⁾、ブレスラウ H. Breslau⁴⁾、ホルツマン R. Holzman⁵⁾ は、古文書学的・文体様式学的研究の視点から、この「君主 senior」をエムニルダの父ドプロミールを指すものである、と主張している。それに対してバルゼル O. Balzer⁶⁾、ザグジェフスキ S. Zakrzewski⁷⁾ は、オットー三世を指すものだと述べている。

さらに一〇〇〇年の会見から十数年経た後、ボレスラフ・フロブリは息子ミェシコ二世とその妻リヘーザの子、すなわち自分の孫にカロール Karol という名を与えている。この点は、『匿名のガル年代記』第一卷十七章が書き記しているところである。

「偉大なボレスラフがこの世を去ると、王国はその息子ミェシコ二世が継いだ。彼は父が生きていた時にすでにオットー三世の妹（姉？）を妻に迎え、この妻からカジミェシ、すなわちポーランドの復興者カロールをもうけた」。

“Postquam ergo magnus Boleslavus de mundo decessit, secundus Mescho, filius eius, in regnum successit, quia iam vivente patre sororem tertii Ottonis imperatoris uxorem acceperat, de qua Kazimirus, id est Karolum, restauratorem Poloniae procreavit.” (*Chronica Polonorum* [7], s. 436.)^{*}

* ミェシコの妻となったのは、正確にはオットー二世の姉妹でなく、姪のリヘーザ Rycheza である。後述を参照。

同時代のポーランドの有力君主達の中には、どこにもカロールという名前が見い出せないものであるから、ボレスラフは意識的にカール大帝の名を取った、と推定されるのである。それでは、なぜボレスラフはカール大帝の名を与えることにしたのだろうか。

その点について二、三の興味深い資料が残されている。オットー三世が、ゲニエズノ墓参をすませた後、ボレスラフをマゲデブルグまで随行させていることについては諸々の資料の一致するところである（『ティトマールの年代記』および『クフェドリンプルグの年代記』その他）。

「そこ（ゲニエズノ）から去って、ボレスラフは選り抜きの御供とともにマゲデブルグまで行った。そこでは主の枝の日が荘重に祝われた」。

“Hunc abeuntem Bolizlavus comitatu usque ad Magadaburg deducit egregio, ubi palmarum sollemnia celebre peracta sunt.” (*Thietmar* [14], *Liber* IV. 46)

しかしながら『クフェドリンプルグの年代記』においては、オットー三世はさらにアーヘンまでボレスラフを随行させている。

「（オットー三世は）復活祭の八日間、そこからさらに旅行し、当時ローマに次いですべての都市に対して優越した地位を与えようとしていたマインツ、ケルン、アーヘンに自分の姉妹を訪ね、ボレスラフに対して大いなる尊敬と友情を抱いて彼をもてなし、ボレスラフの贈物に返礼をなし、これらの都市を案内して、しばらくの間休息をとった。」

“In octava pascae inde profectus, sororem suam Moguntiae, Coloniae, Aquisgrani, quam etiam cunctis tunc post Romam urbibus praeferre moliebatur, una secum summa veneratione fraternaque caritate comitante, remunerato Bolizlavone, perducens, aliquantulum temporis, ... quievit.” (*Annales*

Quedlinburgenses [3], s. 77.)

ところで、そのアーヘンでは、ティトマルも記しているように、オットー三世はカール大帝の墓を開くという大胆な行爲を行っている。もし『クフェドリントルクの年代記』の書き記したように、ボレスラフがアーヘンまで随行していったとすれば、ボレスラフはオットーのカール大帝の墓開きに立ち会っていることとなる。そしてここにその事について述べている一つの資料がある。

十一世紀初めに書かれたいわゆる『アデマール・デ・シャヴァンの年代記』*Ademar de Chabannes Chronique* (単に『アデマールの年代記』*Ademari Chronicon* とも呼ばれる) は次のように記している*。

* アデマール・デ・シャバン *Ademar de Chabannes* は、九八八年中部フランスのオート・ヴィエンヌ *Haute-Vienne* のシャバン *Chabannes* で生まれ、リモージュ *Limoges* の聖マルチアリス修道院の修道僧となり、後アンクレム *Angoulême* に移って一〇三〇年に没する。精力的な蔵書家・写本家で特に『フレデガールの年代記』*Kronika Fredegara* と『ロルシュの年報』*Rocznik z Lorsch* の写本を多く残した。歴史書として『リモージュ修道院長の追憶とアクフィタニアの年代記』*Commemoratio abbatum Lemovicensium i Chronicon Aquitanicum* を残した。この歴史書は、三つの部分からなる。第一の部分は、フランク族の起源から七八年までの歴史。第二の部分はカール大帝の歴史。第三の部分は、八一四年から一〇二八年までの歴史。最後の部分の第十六章から最後までは著者のオリジナルな筆になるもので、十・十一世紀のアクフィタニア地方の主要な歴史資料となっている。特に第三巻においては、おそらく十一世紀中葉の注釈家の手による書き込みがあり、今引用している部分はその中に含まれているものである (SSS t. I, s. 4)。

「このような時に、皇帝オットーは、夢の中でアーヘンに埋葬されているカール大帝の遺体を引き上げるべしとの御告を受けた。しかし長年の忘却によってどこに眠っているのか、はっきりした場所は誰も知らなかった。三日間の断食ののち、皇帝が幻を通して知った場所に（カールは）横たわっていた。マリア教会の会堂の地下安置所の中で、黄金の椅子に座り、金と宝石からできた王冠をかぶり、笏と美しい黄金から作られた刀を持っていた。しか

も体そのものには損傷がなかった。皇帝は、こうして引き上げられた物を人々に見せた。……皇帝オットーは殉教者アダルベルトゥスの聖遺物を受け取る返礼としてカールの黄金の玉座をボレスラフ王に贈った。ボレスラフ王の方は、贈物を受け取って、皇帝に聖人の腕を贈った。皇帝はこれ喜んで受け取り、殉教者聖アダルベルトゥスの榮譽のために、アーヘンに立派な教会堂を、そしてそこに神の僕達のために修道院を、またこの殉教者の榮譽のためにローマに別の僧院を建てた。」

“Quibus diebus Oto imperator per somnum monitus est, ut levaret corpus **Caroli Magni imperatoris**, quod Aquis humatus erat, sed vetustate oblitterante, ignorabatur locus certus, ubi quiescebat. Et peracto triduo ieiunio, inventus est eo loco, quem per visum cognoverat imperator, sedens in aurea cathedra, intra arcuatam speluncam infra basilicam Marie, coronatus corona ex auro et gemmis, tenens sceptrum et enssem ex auro purissimo, et ipsum corpus incorruptum inventum est. Quod levatum populis demonstratum est……**Solum eius aureum imperator Oto direxit regi Botislavo pro reliquiis sancti Adalberti martiris**. Rex autem Botislavus, accepto dono, misit imperatori brachium de corpore eiusdem sancti, et imperator gaudens illud excepit, et in honore sancti Adalberti martiris basilicam Aquisgrani construxit mirificam, et ancillarum Dei congregationem ibi disposuit. Aliud quoque monasterium Romae construxit in honore ipsius martiris.” (*Ademari Chronicon* [1]. *Liber III* s. 130.)

この年代記の中でボレスラフは、オットーがカール大帝の墓を開いた時に立ち会い、しかもその時オットーによってカール大帝の玉座を贈られている。この点について書き記しているものは、唯一この『アデマールの年代記』だけであるが、ケンチンスキは、オットーとともにボレスラフがアーヘンに赴いたということは十分に想定可能な事柄で

あると考える。なぜなら、すでに九九七年にオットー三世がアダルトベルトゥスの殉教を記念してその建設を命じていたアーヘンの教会堂、修道院は、一〇〇〇年にオットーがグニエズノからの帰路アーヘンを訪ねた時、その落成式にあたっており、ボレスラフが、グニエズノの大司教座設置許可への返礼としてこのアーヘンの教会堂落成式に参列することは当時の儀礼にもなっており、十分に想定しうる事柄であるからとケンチンスキは述べている。

さらにケンチンスキにおいては、このカール大帝の玉座の贈与は、オットーがボレスラフを後継者として選定したことを意味していると考えられている。そしてボレスラフをオットー三世の後継者とみなすこうした考え方は、当時すでにオットー、ボレスラフの周辺においてすでに存在していた、とケンチンスキは見る。その証左として彼は聖ブルーノのハインリッヒ二世にあてた手紙を引用する。

「あらゆる不幸は、王（ハインリッヒ）がボレスラフを信せず、ボレスラフも王に対して怒りを持ち王を信じないというところにある。ああ、何たる不幸な時代よ！ 神聖な皇帝コンスタンティヌスの後には、模範的なカール大帝の後には、今やキリスト教徒を迫害する者はいとも異教徒を改宗させるものはいない」。

“Sed in hac parte pendet omne malum, qua nec rex fidem habet Boleslavoni, nec ipse irato regi. Eheu nostra infelicia tempora ! Post sanctum imperatorem magnum Constantinum, post exemplar religionis optimum Karolum est nunc qui persequatur christianum nemo prope qui convertat paganum !” (*List s. Brunowa*(10). s. 227)

いや、異教徒の改宗に力を注いでいる者は現存している。それは、他ならぬポーランドのボレスラフ公である、と聖ブルーノは力説する。

「ボレスラフ公は精神においても肉体においてもブルシア人改宗に赴く私を心から慰め、いか程の金もそのためには惜しいと思わなかった。あしかし、賢明なる王（ハインリッヒ）が必要に駆られて行った戦争に阻げられて、私を福音の布教において支えることを許されなくなり、またそうすることができなくなった」。

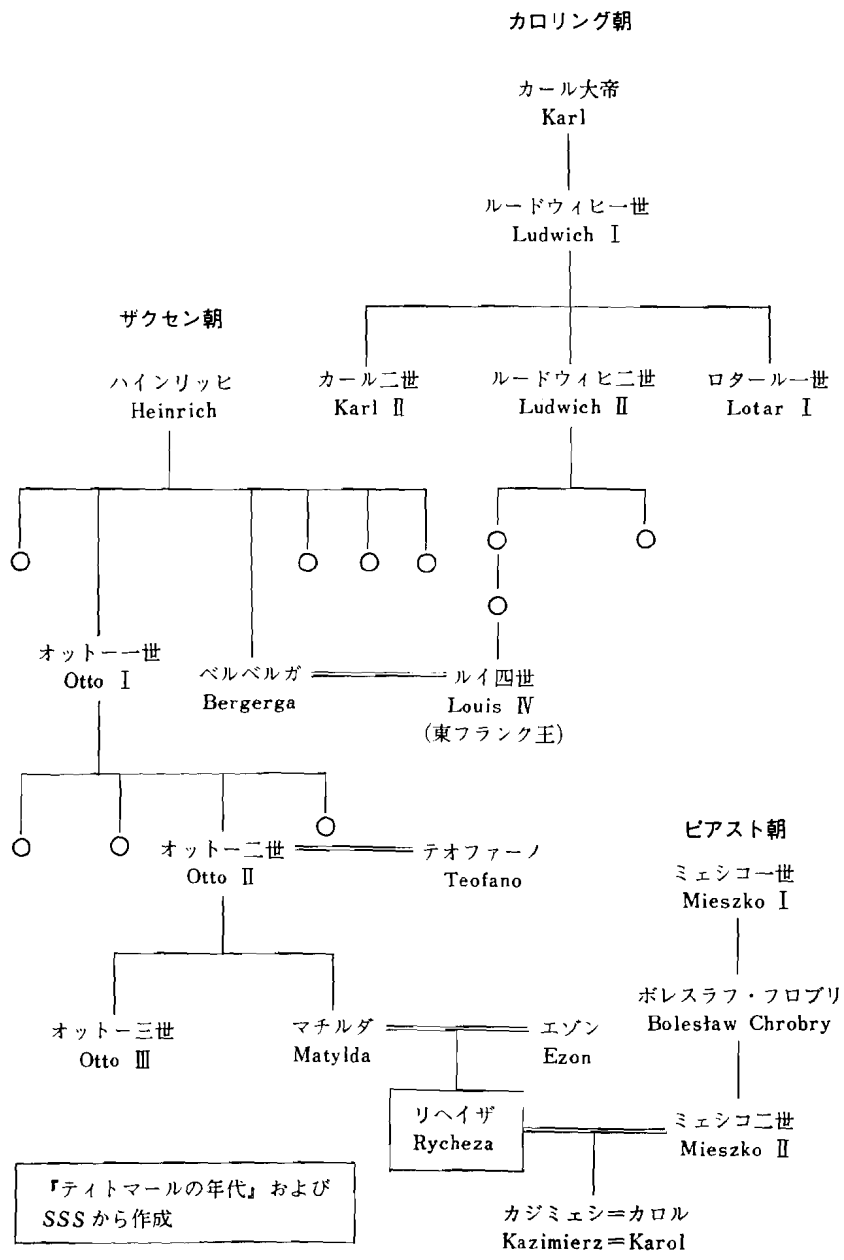
“Senior Boleslavo, qui viribus animi et corporis consolari me ad convertendos Pruzos libentissime voluit, et nulli pecuniae ad hoc parere decrevit, ecce impeditus bello, quod sapiens rex pro necessitate dedit, iuvare me in evangelio nec vacat, nec valet.” (*Ibidem*)

ケンチシンスキは、聖ブルーノの胸中にはドイツ皇帝ハインリッヒではなく、ポーランドの君主ボレスラフこそ、カール大帝の遺志を継ぐ真の後継者である、との考えが明らかに形成されていた、と言うのである。

ケンチシンスキは、またボレスラフの宮廷においてもカール大帝崇拝の伝統が根強く続いていた、と主張し、その鼓吹者としてボレスラフの子ミェシコ二世の妻リヘイザの存在に着目する。

リヘイザの母はオットー三世の姉妹マチルダであり、彼女の居城がアーヘンにあったことから、リヘイザはオットー三世によるカール大帝の慕開きのことをよく知っていたと思われる。リヘイザの祖父・曽祖父にあたるオットー二世、オットー一世がローマ帝国の再興に力を尽してきた伝統は彼女の胸の中にも流れていたと考えるのが自然である。さらにリヘイザの曽祖父オットー一世の姉妹ゲルベルガが東フランク王ルイ四世の妃ともなっていたので、ザクセン朝とカロリング朝の血の繋がりもなお当時存在していたことが注目される。

こうしてリヘイザとミェシコ二世との結婚はボレスラフの宮廷にカール大帝崇拝の伝統を注入する大きなきっかけとなった、とケンチシンスキは主張する（系図参照）。



さらにケンチシンスキは、次の資料を挙げて、オットーの後継者はボレスラフであったとする説を裏づけている。聖ブルーノが書いた『五人の修道会士の伝記』は、一〇〇一年の三月、イタリアのラベンナにおいてオットー三世が聖ロムアルドスと対話した時に述べた言葉を書き残している。

「今より私は神と神の聖人達にむかつて誓約する。今より三年の間に私の失政を改め私よりも優れた人物に統治を委ね、そして母が私に残した遺産を分け与え、裸のまま心こめてキリストにつき従っていきたい」。

“Ex hac hora promitto Deo et sanctis eius : Post tres annos, intra quos imperii mei errata corrigam, meliori me regnum dimittam et, expensa pecunia, quam mihi mater pro hereditate reliquit, tota anima nudus sequar Christum.” (*Brunonis Vita quinque fratrum* [5], s. 392)

この「自分より優れた者」とは誰のことであるのか。ケンチシンスキは文脈から見ても、またオットーがカール大帝の玉座をボレスラフに贈っていることからみて、ボレスラフ・フロブリこそオットーの意中の人であった、と主張する。

おおよそ以上がケンチシンスキの提出した説の全容である。もちろんこの説はいまだ十分にして確実なる資料によって裏づけられているとは言えない。『アデマール・デ・シャパンの年代記』の記述も、『クフェドリントルクの年代記』の記述もこれだけでは事実か否かを断定する決め手にはならないし、聖ブルーノの手紙も『五人の修道会士の伝記』の記述もオットー三世の側近であると同時にボレスラフに好意的な著者によって書かれたものである。さらに事柄はオットーの内面にも係わる極めて微妙な問題だけに事態を一義的に確定することはそもそも困難な事柄である。ドイツ側の史書は、いうまでもなくこの問題には全く触れておらず。オットーの早すぎる死は、オットーの構想を一

場の夢と化してしまった。しかしながら我々は、ヴォイチェホフスキ、ケンチシンスキが力をこめて展開したその説の中にポーランド中世史研究の一つの根強い傾向を見ることはできる。ヨーロッパの辺境ポーランドこそ、西欧の普遍的なキリスト教君主の像(イデー)を正統に引き継ぐものであるという命題を立証すること。ポーランドの中世史家たちの一潮流はここに多くの精力を注ぎ込んできたかのように思われるのである。

第六章 結びにかえて——『匿名のガル年代記』からドュウゴーシの年代記へ——

以上述べてきたように、オットー三世とボレスラフのグニエズノの会見については、多くの研究が積み重ねられ、多くの説が立てられてきた。ボレスラフは王位に即いたのか否か、またバトリキウスに任じられたのか否か、さらに皇帝オットー三世の後継者として考えられたのか否か、今日までいまだに確たる解明がなされていない問題として、これからも新しい資料が発見される度に多くの検討が続けられていくことであらう。

しかしながら、少なくともこれだけのことは確認しうるところである。すなわち、『匿名のガル年代記』の記述は、ルネサンスまでのポーランドの歴史書に決定的な影響を与え、ポーランド人の歴史観に消すことのできない刻印を押した、ということである。

たとえば、十四世紀初めに編集された『クラコフ年報』*Roczniki Krakowskie* は次のように書き残している。

「一〇〇二年、オットー・ルーフス三世は聖アデルベルトゥス(の墓)を訪れ、また大いに期待していたボレスラフとの会見を行った。このボレスラフは、皇帝の命によって王の位に昇り、自分に与えられた贈物を受けとった」。

“1002. Sanctum Adalbertum Otto Rufus III. visitavit et Boleslaus nimio desiderio vidit. Iste Boleslaus

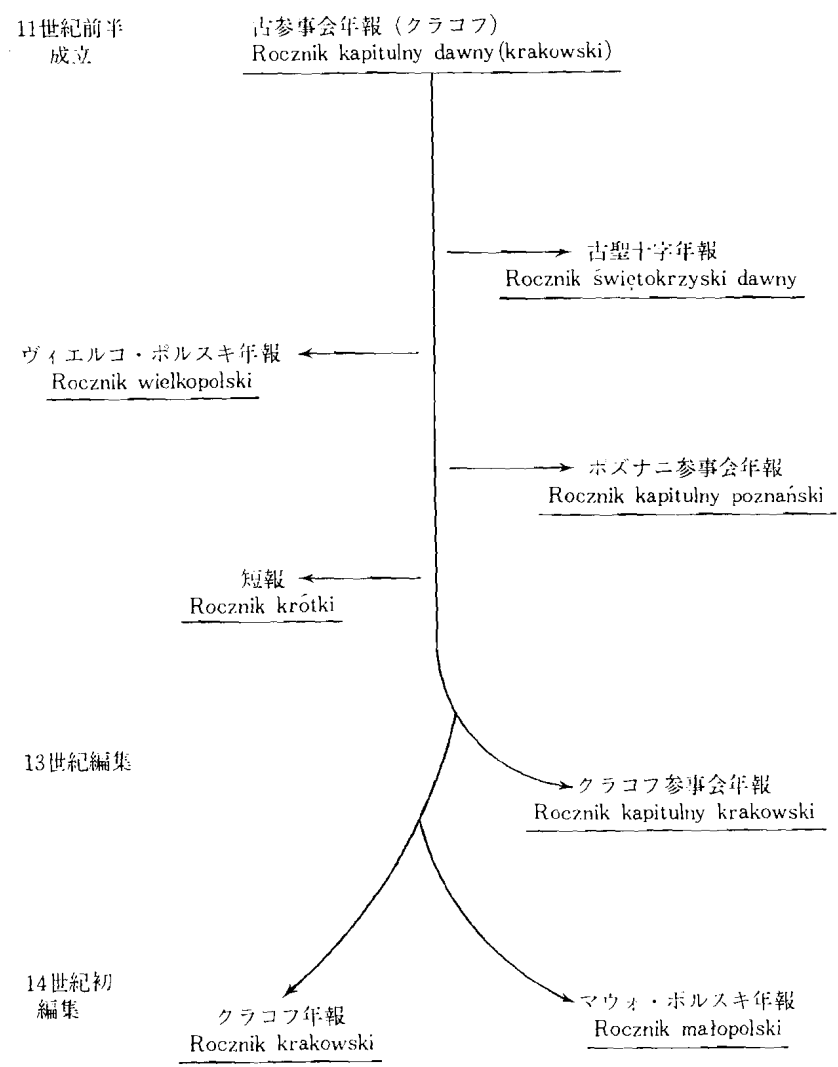
a predicto imperatore in regem sublimatus inditiam sibi liberalitatem exercuit.” (*Rocznik Krakowski* [13], s. 829) *

* 一〇〇二年は誤記。リベラリタス *liberalitas* は、中世ラテンでは「自由人の状態」の意味を持つ。その意味を取ると、ボレスラフはまさに「独立」の君主権力を与えられたことになる。

『匿名のガル年代記』の後に書かれた歴史書では、まず十二世紀末から十三世紀初めに書かれた『マギステル・ヴィンセンティのポーランド年代記』 *Magistri Vincentii Chronicon Polonorum* を挙げねばならないが、一〇〇〇年のゲニエズノの記述に関する限り、後世への影響は強くないといえるであろう。この年代記においては、ボレスラフの王位については殆ど明示されず、皇帝は自らの冠をボレスラフの頭に置くけれどもボレスラフと兜の交換によって彼の君主としての徳を称えているにとどまってしまう。“*Imperiale itaque sibi detrahens diadema, capiti Boleslai non sine reverentia imponit, illius e converso galunmate suum caput convenstans.*” (*MPH* t. 2, s. 278) など『クラコフ年報』の成立過程については次頁の図参照のこと。

さらに十三世紀末、あるいは十四世紀にボズナニで書かれたとされている『ヴィエルコ・ボルスカ年代記』 *Chronica Poloniae Maioris* では、次のように書き記されている。

「ルーディと呼ばれるオットー三世の時代、皇帝は生前大変に親愛の情を寄せていた聖アダルベルトゥスの墓参りのためにポーランドに赴いた。ボレスラフは敬意を抱いて皇帝を迎え、豪勢なもてなしをした。皇帝はその好意に報いてボレスラフを皇帝の協力者に任じ、彼に王冠を与えた。さらにボレスラフの息子ミェシコに自分の腹違いの姉妹を妻として与える約束をした。そしてボレスラフには贈り物として聖マウリチウスの槍と主の釘を贈った。ボレスラフは返礼として他の贈り物とともに皇帝に、互いの友情と皇帝の位への敬愛の印として、聖アダルベルトゥスの腕を贈った」。



一五六

SSS から作成

„Huius tempore Otto imperator tercius dictus Rufus gracia visitandi sancti limina Adalberti, quem in vita valde dilexerat, Poloniam intravit. Quem Boleslaus honorifice suscepit et magnifice pertractavit. Ipseque vicem in bono rependens Boleslaum consortem Imperii ordinavit sibi que **dyadema regium** inposuit ac filio suo Meszkoni sororem suam uterinam in uxorem desponsavit et pro munere lanceam sancti Mauricii et clavem Domini Boleslao donavit. Boleslaus autem Ottoni imperatori brachium sancti Adalberti martyris in signum dileccionis mutue et ab reverenciam imperialis dignitatis inter cetera dona redonavit.”
 (*Chronica Poloniae Maioris*[6], s. 17)

教会に対する支配権の授与の記述が欠落し、ボレスラフへの呼称が若干の省略をうけているのに対し、ミェシコ二世に妻を与える約束が付け加えられている。しかしその他の点ではほとんどそのまま『匿名のガル年代記』を踏襲している。

そして最後に、ポーランド中世最大の歴史家ヤン・ドゥウゴシが二十五年の歳月をかけて完成させた12巻におよぶ記念碑的な年代記『栄光のポーランド王国年代記』*Annales seu Cronicae inclity regni Poloniae* においては次のように叙述されている。

「『……もしもこのような人物、我々にも我々の帝国にも友好的なこのような人物を、王座の高き所に挙げないで、ささやかな公の称号のもとにとどめておくとするれば、それは恥ずべき大きな罪を犯すことになるだろう。諸公の中で、彼以上の者を我々は知らないし、彼の勢威は彼を王に等しき者たらしめている。それゆえ、もし諸君がそれによいと思われ、そうすることが有益であると思われるならば、神の栄光のために、聖なる信仰を振り興すためにも、

ポーランドと境を接する異教徒を根絶するためにも、ボレスラフをつつしんで王の位に引き上げようと思う。……』皇帝オットーは、部屋から出てボレスラフ公とともにグニエズノの大聖堂に赴く。この二人に多くの騎士と無数の男女の群衆がつき従った。教会に着くと、皇帝オットーは、グニエズノの大司教ガウデンティと他のポーランドの司教達に聖油でもってボレスラフをポーランド王として塗油するように、また戴冠と王の塗油の際に通常行われるすべての事柄を、正しく整えられた祈禱と儀式とともにとり行うように命じた。このことがなされた後、取り囲んでいるすべての群衆から見えるように、一段と高くされた王座にボレスラフは導かれた。そこで皇帝オットーは自分の頭の上にあつて、それを飾っていた立派な冠をうやうやしくボレスラフの頭に載せ、ボレスラフおよび彼の後継者をポーランド王であると宣言し、ローマ皇帝の同盟者および友人と呼んだ。そしてすべてのポーランドの土地と人民を彼に従わせ、将来征服されるべき異教徒および分離派の侯国や地方・地域に対する支配権を与えた。……さらにポーランドの王と王国に様々の特権・自由・権限を与え、自由な地位を下賜してその地位を引き上げ永遠にボレスラフとその子孫をローマ帝国への臣従と従属の軛から解放した。……このようにしてポーランド共和国は王国になり、ポーランド公ボレスラフはすべてのスラブ諸侯の上に立つことになった。

“Turpe itaque, imo scelus grande reor, si vir tantus et tam nostre persone quam imperii nostri amicissimus sub sola ducalis tituli modestia delitescat et non potius in regalis culminis evehatur fastigium, cui superiorem ignoramus inter duces, et quem potencia regibus parem facit. Hunc itaque nos, si et vobis id bonum utileque videtur, pro Dei honore, fidei sante exaltatione et incremento, et barbararum nationum, que Polonorum regioni confinatur, exterminia, regio dignamur honore……”

imperator Otto ex talamo egressus cum duce Boleslao in Gneznensem ecclesiam pergit, utrunque comitante frequentia militum et populorum utriusque sexus multitudine infinita. Ubi dum perventum esset,

mandat imperator Otto Gaudencio Gneznensi archiepiscopo ceterisque episcopis Polonie Boleslaum in regem Polonorum sacro crismate inungi et singula, que in regum coronacionibus et unccionibus fieri solita sunt, cum oracionibus et obsecracionibus consuetis iusto ordine persolvi. Quo expleto, in sellem eminencioiorem, ex qua ab omni circumstante turba videri posset, productum, imperator Otto dyadema nobile, quod tunc in capite gestabat, vertici suo deponens, tempora Boleslai ducis illo coronat et insignit, constituens et decernens eum et eius quemlibet posterum et successorem Polonorum regem et imperii Romanorum socium et amicum, subiciens sibi et regno suo omnes Polonorum regiones natione-sque donans vero singulos principatus, terras et districtus per eum et successores suos reges Polonie sub barbaris infidelibus et scismaticis nacionibus acquisitos..... reges Regnumque Polonie singularibus privilegiis libertatibus et prerogativis eximens, libertans et extollens, et a sua suorum que successorum imperatorum Romanorum obediencia et subieccione perpetuo remittens et absolvens.

.....In hunc itaque modum Polonorum respublica in regum iura redacta est et Boleslaus Polonorum princeps supra omnes generis Slawonici atque lingue duces magnificatus." (*Annales seu Cronicae incliti regni Poloniae*, Varsaviae 1964, Liber II. s. 232.)

このデュウゴシの叙述が『匿名のガル年代記』の記述を忠実に踏まえていることは一見して明らかなことである。しかも『匿名のガル年代記』よりも叙述において詳しく、あたかもそれが事実であったかのような情況描写すらなされている。さらに『匿名のガル年代記』においては若干の曖昧さを残していた内容がより明確に表現されている。ここではボレスラフがポーランド王に即位したことは疑いようもなく明瞭に述べられ、しかもローマ帝国からの永遠の

解放が断言的に書き込まれている。かくしてデュウゴシの年代記にいたって、それ以前の年代記の主張は一つの頂点にまで到達したということができるであろう。

略 記 法

MPH = *Monumenta Poloniae Historica*, I—IV. Kraków 1864—1893.
MGH SS = *Monumenta Germaniae Historica, Scriptores*. Hannover 1826, nn.
SSS = *Słownik starożytności słowiańskich—Encyklopedyczny zarys kultury słowian od czasów najdawniejszych*. Kraków—Wrocław—Warszawa 1961—84. I—VII.

原典文献リスト

- [1] *Ademari Chronicon* : *MGH SS*. t. IV.
- [2] *Annales Hildesheimensis* : *MGH SS*. t. III.
- [3] *Annales Quedlinburgenses* : *MGH SS*. t. III.
- [4] *Annales seu Cronica incliti regni Poloniae Iovannis Dlugossii*, t. I—II. Warszawa 1964.
- [5] *Brunonis Vita quinque fratrum* : *MPH*. t. VI.
- [6] *Chronica Poloniae Maioris* : *MPH. Nova Series*, t. VIII.
- [7] *Chronica Polonorum (Galli Anonymi Chronicon)* : *MGH SS*. t. IX.
- [8] *Graphia auriac urbis Romae* : P. E. Schramm, *Kaiser, Rom und Renovatio*, Berlin 1929. t. II
- [9] *Legenda aurea—Złota Legenda*, Jakub de Voragine, Wybór, Warszawa 1983.

- [10] *List s. Brunnona do Henryka II cesarza*, : MPH. t. I.
- [11] *Lindprandi Antapodoseos*, : MGH SS. t. III.
- [12] *Magistri Vincenti Chronicon* : MPH. t. II.
- [13] *Roczniki Krakowskie* : MPH. t. II.
- [14] *Thietmari Merseburgensis episcopi Chronicon—Kronika Thietmara*, Poznań 1953.
- [15] *Wiponis Gesta Chuonradi II*, MGH SS. t. XI.

一〇〇〇年のドイツ人の歴史書

- ① A. Naruszewicz, *Historia narodu polskiego od początku chrześcijaństwa*, t. 2. Warszawa 1780.
- ② J. S. Bandtkie, *Dzieje królestwa polskiego*, t. I. Wrocław 1810.
- ③ R. Roepel, *Geschichte Polens*, Hamburg 1840.
- ④ J. Lelewel, "O związkach z Niemcami królów polskich i tytule ich królewskim, ; *Polska wieków średnich*, t. 2. Poznań 1856.
- ⑤ K. Szajnocha, *Bolesław Chrobry*, Lwów 1859.
- ⑥ J. Stasiński, *De rationibus, quae inter Poloniam et imperium Romano-Germanicum Ottonum imperatorum aetate intercedebant*, Diss. Berlin 1862.

- ⑦ A. F. Gfroerer, *Papst Gregor VII und sein Zeitalter*, Schaffhausen 1862.
- ⑧ H. Zeisberg, "Über die Zusammenkunft Kaiser Ottos III mit Herzog Boleslaw von Polen zu Gnesen." : *Zeitschrift. f. die österr. Gymnasien* 18. Lemberg (Lwów) 1867.
- ⑨ X. Liske, "Boleslaw Cmbry i Otto III w Gnieźnie." : *Dziennik Literacki*. 1869.
- ⑩ J. Szujski, "Piegrzymka Ottona III do Gniezna w roku 1000." : *Przegląd Polski*, styczeń 1872.
- ⑪ F. Czerny, *Związki państwowe i kościelne Czech, Polski i Węgier*, Kraków 1872.
- ⑫ A. Malecki, "Wewnętrzny ustroj w pierwotnej Polsce." : *Przewodnik Nauk-Liter.* 1875.
- ⑬ M. Bobrzyński, *Dzieje Polski w zarysie*, t. 1. Warszawa 1879.
- ⑭ W. Giesebrecht, *Geschichte der deutschen Kaiserzeit*, Braunschweig-Leipzig 1881.
- ⑮ K. Rawer, "Polityczne znaczenie zjazdu gnieźnieńskiego w roku 1000." : *Sprawozd. gimn. im Franciszka Józefa*, Lwów 1882.
- ⑯ K. Wersche, "Das staatsrechtliche Verhältniss Polens zum deutschen Reich während des Mittelalters." : *Zeitschrift der Hist. Gesellschaft für die Provinz. Posen* 3. 1888.
- ⑰ W. Abraham, *Organizacja Kościoła w Polsce do połowy XIII wieku*, Lwów 1893.
- ⑱ O. Balzer, *Genealogia Piastów*, Kraków 1895.
- ⑲ W. Kętrzyński, "Przyczynki do historii Piastowiczów i Polski piastowskiej," : *Rozprawy Akademii Umiejętności Wydział Hist-Filoz.* 37. 1898.
- ⑳ K. Uhlig, *Jahrbücher des Deutschen Reichs unter Otto II und Otto III*, Leipzig 1902.
- ㉑ H. G. Voigt, *Brun von Querfurt*, Stuttgart 1907.

- ②⑥ K. Żmigrod—Stadnicki, *Die Schenkung Polens an Papst Johannes XV*, Freiburg 1911.
- ②⑦ P. Kehr, "Das Erzbistum Magdeburg und die erste Organisation der christlichen kirche in Polen," : *Abhandlungen d. preuss. Akademie do Wiss. Phil—Hist.* 1920. nr. 1.
- ②⑧ S. Zakrzewski, *Historia polityczna Polski. Okres do schyłku XII wieku. Encyklopedia Akademii Umiejętności*. t. 5, cz. 1 Kraków 1920.
- ②⑨ W. Abraham, *Gniezno i Magdeburg*, Kraków 1921.
- ③② S. Zakrzewski, *Mieszko I jako budowniczy państwa polskiego. Biblioteka Sładnicy I*, Warszawa 1921.
- ③⑦ S. Zakrzewski, *Bolesław Chrobry Wielki*, Lwów 1925.
- ③⑧ M. Dragan, *Koronacja Bolesława Chrobrego*, Lublin 1925.
- ③⑨ R. Grodecki, *Dzieje Polski średniowiecznej*, t. 1. Kraków 1926.
- ③⑩ K. Tymieniecki, "Dzieje polityczne Polski piastowskiej," : *Wiedza o Polsce*. t. 1.
- ③⑪ S. Arnold, *Budowniczość państwowości polskiej, Polska, jej dzieje i kultura*, Warszawa 1927.
- ③⑫ M. Ter-Braak, *Kaiser Otto III. Ideal und Praxis im frühen Mittelalter*, Leipzig 1928.
- ③⑬ P. E. Schramm, *Kaiser, Rom und Renovatio* t. 1 — 2. Berlin 1929.
- ③⑭ A. Brackmann, "Der 'Römische Erneuerungsgedanke' und seine Bedeutung für die Reichspolitik der deutschen Kaiserzeit," : *Sitzungsberichte d. Preuss. Akademie d. Wiss. Phil—Hist. Kl.* 1932. nr. 17. : *Gesammelte Aufsätze*.
- ③⑮ M. Z. Jedlicki, "La Création du premier archevêché polonais à Gniezno et ses conséquences au

point de vue des rapports entre la Pologne et l'Empire germanique." : *Revue historique de droit français et étranger*, 1933.

③⑥ O. Balzer, *Historia ustroju Polski, Skrypt wykładów uniw.*, Lwów 1933.

③⑦ A. Brackmann, "Die Anfänge des polnischen Staates." : *Sitzungsberichte d. Preuss. Akademie d. Wiss. Phil-Hist. Kl.* 1934. nr. 29.

③⑧ A. Brackmann, "Reichspolitik und Ostpolitik im frühen Mittelalter." : *Sitzungsberichte d. Preuss. Akademie d. Wiss. Phil-Hist. Kl.* 1935. nr. 32. ; und *Gesammelte Aufsätze*.

③⑨ M. Z. Jedlicki, "Die Anfänge des polnischen Staates." : *Historische Zeitschrift*. 152 (1935).

④⑥ A. Brackmann, "Die politische Bedeutung der Mauritius-Verehrung im frühen Mittelalter." : *Sitzungsberichte d. Preuss. Akademie d. Wiss. Phil-Hist. Kl.* 1937 nr. 31 ; *Gesammelte Aufsätze*.

④① G. Sappok, "Die Anfänge des Bistums Posen und die Reihe seiner Bischöfe von 968 bis 1498." : *Deutschland und der Osten*. 6. 1937.

④② G. Labuda, "Magdeburg i Poznań." : *Roczniki Historyczne*. 14. Poznań 1938.

④③ K. Buczek, "Pierwsze biskupstwa polskie." : *Kwartalnik Historyczny*. 62. Warszawa 1938.

④④ K. Buczek, "Ze studiów nad Kroniką Galla Anonima." : *Roczniki Historyczne*. 14. 1938.

④⑤ H. F. Schmid, *Die rechtlichen Grundlagen der Pfarrorganisation auf westslawischen Boden und ihre Entwicklung während des Mittelalters*, Weimar 1938.

④⑥ A. Brackmann, "Kaiser Otto III und die staatliche Umgestaltung Polens und Ungarns." : *Abhandlungen d. Preuss. Akademie d. Wiss. Phil-Hist. Kl.* 1939. nr. 1 und *Gesammelte Aufsätze*.

- ④7 M. Z. Jedlicki, "Stosunek prawny polski do Cesarstwa do roku 1000", : *Prace Komisji Histor. Pozn. Tow. Przyjaciół Nauk*, 12. 1939.
- ④8 E. E. Stengel, "Die Grabschrift der ersten Äbtissin von Quedlinburg." : *Deutsches Archiv für Geschichte des Mittelalters*, 3. 1939.
- ④9 A. Brackmann, "Zur Entstehung des ungarischen Staates." : *Abhandlungen d. Preuss. Akademie d. Wiss. Phil.-Hist. Kl.* 1940. nr. 8.
- ⑤0 M. Uhlig, "Kaiser Otto III und das Papsttum." : *Historische Zeitschrift*. 162. 1940.
- ⑤1 G. Tellenbach, "Über Herzogskronen und Herzogshütte im Mittelalter." : *Deutsches Archiv für Geschichte des Mittelalters*, 5. 1941.
- ⑤2 C. Erdmann, "Das ottonische Reich als Imperium Romanum." : *Deutsches Archiv für Geschichte des Mittelalters*, 6. 1943.
- ⑤3 Z. Wojciechowski, *Polska nad Wisłą i Odrą w X wieku*, Poznań 1945.
- ⑤4 Z. Wojciechowski, *Państwo polskie w wiekach średnich*, Poznań 1945.
- ⑤5 G. Labuda, *Studia nad początkami państwa polskiego*, Poznań 1946.
- ⑤6 S. Kętrzyński, "Karol Wielki i Bolesław Chrobry." : *Przegląd Historyczny*, 36. 1946.
- ⑤7 Z. Wojciechowski, "Bolesław Chrobry i rok 1000." : *Przegląd Zachodni*. Poznań 1948.
- ⑤8 Z. Wojciechowski, "Bolesław Chrobry i kryzys stosunków polsko-niemieckich." : *Przegląd Zachodni*. Poznań 1948.
- ⑤9 J. Widałewicz, *Początki Polski*, Wrocław 1948.

- ⑥⑩ Z. Wojciechowski. "Patrycjat Bolesława Chrobrego." : *Roczniki Historyczne*, 18. Poznań 1949.
- ⑥⑪ R. Gansiniec, "Nagrobek Bolesława Wielkiego." : *Przegląd Zachodni*, 1951. z. 7/8.
- ⑥⑫ L. Koczy, "The Holy Roman Empire and Poland" : *Antemurale*, 2. Romae 1955.
- ⑥⑬ H. Beuman, "Die ältern Papsturkunden für das Erzbistum Magdeburg und die Suffraganstellung des Bistums Posen." : *Archiv für Diplomatik*. 1. Münster-Köln 1955.
- ⑥⑭ W. Schlesinger, H. Beuman, "Die deutsche Ostpolitik unter Otto III." : *Archiv für Diplomatik*, 1. Münster-Köln 1955.
- ⑥⑮ R. Wenskus, *Studien zur historisch-politischen Gedankenwelt. Bruns von Querfurt*, Münster-Köln 1956.
- ⑥⑯ R. Wenskus, "Brun von Querfurt und die stiftung d. Erzbist. Gnesen." : *Zeitschrift für Ostnamentforschung*, 5. München 1956.
- ⑥⑰ W. Mejsztowicz, "Koronacje pierwszych Piastów" : *Sacram Poloniae Millemium*, 3. Rzym 1956.
- ⑥⑱ P. Bogdanowicz, "Uwagi nad panowaniem Mieszka I." : *Roczniki Historyczne*, 26. Poznań 1960.
- ⑥⑲ G. Labuda, "Zagadnienie suwerenności Polski wczesnofeudalnej w X-XIII. wieku." : *Kwartalnik Historyczny*, Warszawa 1960.
- ⑦⑩ H. Jäger, *Rechtliche Abhängigkeitsverhältnisse der östlichen Staaten vom Fränkisch-Deutschen Reich*, Gelbhausen 1960.
- ⑦⑪ S. Kętrzyński, *Polska X-XI wieku*, Warszawa 1961.
- ⑦⑫ K. Tymieniecki, "Państwo Polskie w stosunku do Niemiec i cesarstwa średniowiecznego w X

- wieku.”: *Początki państwa Polskiego*. t. 1. Poznań 1962.
- ⑦③ M. Uhlirz, “Nachträge zur Quellenkunde der Zeit Kaiser Ottos III 983–1002.”: *Ostdeutsche Wissenschaft*, 9. München 1962.
- ⑦④ W. Dzieciol, *Imperium i państwo narodowe około 1000 r.*, Londyn 1962.
- ⑦⑤ P. Bogdanowicz, “Zjad gnieźnieński w roku 1000.”: *Nasza Przyszłość*, 16. 1962.
- ⑦⑥ H. Ludat, “Reichspolitik und Pfaffenstaat um die Jahrtausendwende.”: *Saeculum*, 14, 1963.
- ⑦⑦ J. Bardach, *Historia państwa i prawa*, t. 1. 1964.
- ⑦⑧ A. F. Grabski, *Bolesław Chrobry*, Warszawa 1964.
- ⑦⑨ T. Wasilewski, “Bizantyńska symbolika zjazdu gnieźnieńskiego.”: *Przegląd Historyczny*, 57. Warszawa 1966.
- ⑧⑩ K. Malecynski, “W sprawie zjazdu gnieźnieńskiego z 1000 roku.”: *Sobótka*, 23, 1966.
- ⑧⑪ H. Kowmiański, *Początki Polski*, 5 t. Warszawa 1973.
- ⑧⑫ J. Mularczyk, “Echa koronacji królewskich w polskim dziejopisarstwie do końca XII wieku.”: *Acta Universitatis Wratislaviensis*. nr. 226. *Historia*, t. 26. Wrocław 1974.
- ⑧⑬ *Kraków miasto muzeów*, Warszawa 1977.
- ⑧⑭ Zentralinstitut für Geschichte der Akademie der Wissenschaften der DDR. *Deutsche Geschichte*. t. 1, Berlin 1982.
- ⑧⑮ R. Michałowski, “Restauratio Poloniae w ideologii dynastycznej Galla Anonima.”: *Przegląd Historyczny*, t. 76. z. 3. Warszawa 1985.

- ⑧ 荒木勝「ポーランド最古の年代記——『匿名のガル年代記』について」(岡山大学『法学会雑誌』第三五卷第二号、一九八五年)。
- ⑨ 荒木勝「聖スタニスワフ崇拜の形成について——『ガル年代記』から『ヴィンセンティ年代記』へ——」(岡山大学『法学会雑誌』第三五卷第三・四号、一九八六年)。

聖マウリチウスの槍に関する文献

- (1) A. Przezdziecki, "O włóczni św. Maurycego w skarbcu krakowskim," : *Biblioteka Warszawska*, 1861.
- (2) S. Zakrzewski, ②⑦
- (3) G. Haupt, *Die Reichsinsignien. Ihre Geschichte und Bedeutung*, Leipzig 1940.
- (4) F. Kopera, *Dzieje skarba koronnego, czyli insygniów i klejnotów koronnych*, Kraków 1904.
- (5) A. Hofmeister, *Die heilige Lanze—ein Abzeichen des alten Reiches*, Breslau 1908.
- (6) A. Weiseltgärtner, "Die weltliche Schatzkammer in Wien." : *Jahrb. der kunst-hist. Sammlungen in Wien*. 1926.
- (7) H. Kohlhausen, *Die Reichsklenodien*, Berlin 1939.
- (8) M. Z. Jedlicki, ④⑦
- (9) A. Brackmann, ④⑥
- (10) H. W. Klewitz, *Die heilige Lanze Heinrichs I.*
- (11) M. Buchner, *Aus der Vergangenheit der deutschen Reichsinsignien*, Gelbe Hefte 16, 1940.

ヴァルタ川をめぐる貢納関係とていつの文獻

- (1) F. G. Barthold, *Geschichte Pommerns und Rügen*, 1. Hamburg 1839.
- (2) H. Zeisberg, *Misco I. Der erste christliche Beherrscher der Polen*, Wien 1867.
- (3) P. V. Niessen, *Geschichte der Neuemark im Zeitalter ihrer Entstehung und Besiedlung*, 1905.
- (4) K. Wersche, ⁽¹⁶⁾
- (5) A. Brackmann, ⁽³⁸⁾
- (6) E. Randt, *Die neuere polnische Geschichtsforschung über die politischen Beziehungen West-Pommerns zu Polen im Zeitalter Kaiser Ottos des Grossen*, Danzig 1932.
- (7) H. Audin, "Die Ostgrenze des alten deutschen Reiches. Entstehung und staatsrechtlicher Charakter." : *Historische Vierteljahrsschrift*, 28. 1933.
- (8) R. Haltzmann, *Kaiser Otto der Gross*, Berlin 1936.
- (9) H. Ludat, "Mieszkos tributpflicht bis zur Warthe." : *Deutsches Archiv für Landes- und Volksforschung*, 2 1937.
- (10) A. Matecki, ⁽¹²⁾
- (11) R. Grodecki, ⁽²⁹⁾
- (12) K. Maleczyński, *Recenzencja*. z J. Widaiewicza, *Roczniki Historyczne*, 4. 1928.
- (13) S. H. Cross, *Scandinavian Polish relations in the late X-th century w Studies in honour of H. Collits*, Baltimore 1930.

- (14) S. Arnold, ③①
- (15) G. Labuda, ⑤⑤
- (16) A. Brückner, "O nazwach miejscowych." : *Rozprawy Polska Akademii Umiejętności. Wydział Fil.* 64, 1935
- (17) S. Zakrzewski, ②①
- (18) J. Widajewicz, "Licikaviki Widukinda." : *Slavia Occid.* 6, 1927.
- (19) Z. Wojciechowski, "Mieszko I ipowstanie państwa polskiego." : *Zapiski Tow. Naukowego w Toruniu*, 10 (1935-1937), "Jeszcze o Mieszko." *tamże*. "Usque in Vurta fluvium." w księdze pamiątkowej ku czci A. Dopscha. *pt. Wirtshaf und Kultur*. Wien 1936.
- (20) M. Z. Jedlicki, ③⑤ ④⑦